

第3章 民俗調査編

第1節 民俗調査の概要

平成10年度夏期の雨乞い太鼓にかかわる民俗調査は、以下の「雨乞い太鼓調査質問票」(資料1)を基本的な質問項目とし、鹿児島大学比較民俗学研究室学生が中心となって実施した。調査は基本的には、雨乞い太鼓保存会が構成されている地区で行ったが、北段原、新川東、小舟各地区では十分な資料の収集を成し得なかった為、今回の報告では触れていない。これらの地域については改めて補充調査を行い別に報告を行いたい。また、その他の地域に関しては、「雨乞い太鼓アンケート」(資料2)の送付によって雨乞い太鼓の概略についてご回答いただき、その結果を第6表として集約した。

(徳丸亜木)

資料1 雨乞い太鼓調査質問票

雨乞い太鼓、雨乞い踊りの由来

- ◎このムラの雨乞い太鼓、雨乞い踊りは、誰が、どこから、いつごろ伝えたか。
- ◎雨乞い太鼓、雨乞い踊りの由来を記した文書があるか。
- ◎雨乞い太鼓、雨乞い踊りを特に伝える家筋があるか。

雨乞い太鼓を叩く機会(雨乞い太鼓フェスティバル以前のやり方を中心に聞く)

※雨乞い儀礼

- ◎雨乞いは何月ごろ行われる事が多かったか。
- ◎その時期は、どのような農作業を行う時期だったか(時間があったら、後で地域の生産生業について大まかな概要、生産暦を確認する)。
- ◎雨乞いを行う事をどのようにして決めたか。
- ◎雨乞いはこのムラだけで行うか、他のムラも集まって行うか。
- ◎雨乞いにはどのような方法があるか。
 - ・海や淵に水を貰いに行く事があるか。
 - ・山上で火を焚いたり、雨乞い太鼓を叩いたり、雨乞い踊りを踊ったりするか。
 - ・雨乞いの為にムラの中の神社に雨乞い太鼓、雨乞い踊りを奉納するか。
- ◎雨乞いはいつごろまで行われていたか。行われなくなった理由はなにか。
(以上、誰が、どのような方法で行うかを出来るだけ詳しく、具体的に聞く事。
実際の体験者がいれば、その体験を聞く。)

※ムラの神社、堂の祭礼における雨乞い太鼓、雨乞い踊り奉納

- ◎神社(氏神社など)や堂(地藏堂、観音堂など)の祭礼で雨乞い太鼓、雨乞い踊りを奉納していたか。
- ◎奉納する神社・堂の名称、祭神、由来、祭礼の日時。
- ◎神社、堂の祭祀組織 代表者(頭屋、氏子総代など)がいるか、どのようにして選出するか。
- ◎祭礼の時には、祭祀組織はどのような役割を負うか。

- ◎雨乞い太鼓の奉納などで、太鼓の他に作り物（山車や御輿）などを造る事はなかったか。
- ◎だれが、どこで、どのようにして造ったか。
- ◎太鼓、鉦、笛、踊りなど参加者の構成と役割分担。各々の扮装はどのようなものだったか。どのように準備をしたか。
- ◎祭礼に参加出来ない者（不浄に関わるものなど）があったか。
- ◎祭礼の過程（準備、精進潔斎、ヨドの祭＜前夜祭＞、神迎え、神事、頭渡し＜頭屋の引継＞、直会、神送りなど）を出来るだけ具体的に確認。
- ◎どの時点で雨乞い太鼓、雨乞い踊りを奉納するか。
- ◎演じられる太鼓、鉦、笛、踊りなどの演目、所作の特徴。
- ◎雨乞い太鼓、雨乞い踊りを奉納する行列が出る場合その構成。
- ◎どのような順路でムラの中を歩くか（地図に順路を記録する）。
- ◎順路にある小祠、堂などの前で雨乞い太鼓、雨乞い踊りを奉納するか。
- ◎これらの行事における女性の役割はどのようなものであったか。
- ◎雨乞い太鼓、雨乞い踊りに関して記述がある祭礼帳が保存されていないか確認。
- ◎奉納はいつごろまで行われていたか。行われなくなった理由はなにか。
- ※その他の年中行事で雨乞い太鼓や雨乞い踊りを奉納する機会があるか。
- ◎特に、虫送りに雨乞い太鼓を用いる事はなかったか。

雨乞い太鼓の組織

- ◎雨乞い太鼓の為の特別の組織があるか（氏子組織や若者組組織と関係している場合は、各々の組織についても聞き書きする）。
- ◎雨乞い太鼓、鉦、笛、踊りなどの役割分担について。
- ◎加入条件、内部構成、脱退について。

雨乞い太鼓、雨乞い踊りの練習、技術の継承

- ◎雨乞い太鼓、鉦、笛、踊りの練習はどのように行われたか。
- ◎何歳位から練習を行ったか。
- ◎誰から、どのような指導を受けたか。
- ◎どの時期に、何処で練習をしたか。
- ◎奉納行事で最初に演じたのはいつか。
- ◎下の者に教えるようになったのはいつか。

雨乞い太鼓の演目・調子

- ◎雨乞い太鼓の演目にはどのようなものがあるか（すべて聞く）。それぞれの演目を行う機会は決められているか。
- ◎それぞれの調子はどのようなものか。笛、鉦をどのように伴うか。
- ◎行事の流れに応じてどのような順番で演目を演じたか。
- ◎難易度、演目によって打ち手を変えるか。
- ◎演目を録音したテープは保存されていないか。
- ◎古い打ち方を記憶していて、現在も再現出来る古老の方がいらっしゃらないか確認。

雨乞い踊りの演目

- ◎雨乞い踊りの演目にはどのようなものがあるか（すべて聞く）。
- ◎どの演目の雨乞い太鼓に踊りを伴うか。太鼓を伴わない雨乞い踊りはあるか。
- ◎それぞれの踊りはどのようなもので、主に誰が踊ったか。
- ◎行事の流れに応じてどのような順番で踊りを演じたか。
- ◎踊りを録画したビデオテープは保存されていないか。
- ◎古い踊り方を記憶していて、再現出来る古老の方がいらっしゃらないかを確認。

太鼓の管理、保存

- ◎太鼓収蔵庫が出来る前の雨乞い太鼓の保存場所と保存方法。
- ◎太鼓を近年製作、修理した場合は、その手順、方法、かかった金額など。
- ◎太鼓収蔵庫へ太鼓を移転するに際してムラの中で出た意見。

雨乞い大太鼓フェスティバル

- ◎現在の雨乞い太鼓保存会の組織はどのようなものか
- ◎現在の雨乞い太鼓の継承者育成をどのように行っているか
- ◎雨乞い太鼓保存会が抱える問題点について

伝承者について

- ◎雨乞い太鼓について詳しい古老の姓名。
- ◎古い打ち方を記憶していて、現在も再現出来る古老の方がいらっしゃらないか確認。
- ◎古い踊り方を記憶していて、現在も再現出来る古老の方がいらっしゃらないか確認。

資料について（重複）

- ◎演目を録音したテープは保存されていないか。
- ◎踊りを録画したビデオテープは保存されていないか。
- ◎雨乞い太鼓、雨乞い踊りの由来を記した文書が保存されていないか。

資料2 雨乞い太鼓アンケート

このアンケートは、宇土市に伝わる貴重な民俗文化財である雨乞い太鼓について、各集落で昔はどのように行われていたかを調べる為のものです。お忙しいところ、誠に恐縮ですが、アンケートへの回答にご協力をお願い出来れば幸いです。

それぞれの質問について、「はい」「いいえ」のいずれかに○をつけるか、あるいはカッコのなかに、具体的な回答をご記入ください。

1. あなたの集落では、雨乞い太鼓を行っていましたか。 はい いいえ
「はい」の場合、いつごろまで、雨乞い太鼓を行っていましたか。
2. 太鼓は集落にありましたか。 はい いいえ

以下は、雨乞い太鼓を行っていた場合にお答え下さい。

3. 太鼓はどこに保管されていましたが（以下、カッコ内に具体的にご記入下さい）。
4. 太鼓はどのようなかたちのものでしたか（寸法もお教え下さい）。
5. 太鼓がどこから伝えられたか言い伝えがあれば教えてください。
6. 雨乞い太鼓を叩くのは、どのような機会でしたか。
 - 1). 集落の神社のお祭りのとき。（ ）月（ ）日ころ
その神社は何神社ですか。
雨乞い太鼓の奉納はどのようにされましたか。
 - 2). 集落のお堂のお祭りのとき。（ ）月（ ）日ころ
そのお堂は何堂ですか。
雨乞い太鼓の奉納はどのようにされましたか。
 - 3). 雨が降らないとき。（ ）月ころ
神社やお堂に太鼓を、どのように奉納されましたか。
神社やお堂以外で太鼓を叩く場所がありましたか。
太鼓の奉納以外に雨乞いの方法があれば教えてください。
7. 太鼓は主にだれが叩いていましたか。
8. 太鼓の叩き方にはどのような種類がありましたか。
9. 太鼓の練習は、いつごろ、どこで、どのように行いましたか。
10. 女性が雨乞い太鼓のときに踊る踊りにはどのようなものがありましたか。
11. 現在でも雨乞い太鼓についてお詳しい方が居られれば、お名前をお教え下さい。
12. 集落の雨乞い太鼓を録音したり撮影した、カセットテープ、ビデオテープ、写真などをお持ちの方が居られれば、お名前をお教え下さい。
13. 太鼓に関する古文書、鉦、油単などの資料があれば、管理されている方のお名前をお教え下さい。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

第7表 雨乞い大太鼓アンケート集計表

	地区名	雨乞い大太鼓の経緯	何時まで行っていたか	集落に幾人あったか	太鼓は何処に保管されていたか	太鼓の形状	太鼓が何処から伝えられたか	集落神社への奉納の時期	雨乞い太鼓の奉納を行う神社名	神社への奉納の方法
1	古城	×		×						
2	三拾町	×		×						
3	中野	×		×						
4	三日	×		×						
5	曾畑	×		×						
6	布古園	×		×						
7	谷振	×		×	橋本勇氏の小屋					
8	谷振里	×		○						
9	善光寺	×		○						
10	項目	○	戦前まで	○	太鼓小屋	直径1m以上				
11	上松山	○	昭和18年頃まで	○	収納小屋に保管。終戦後小郷機氏の父親が入札で落札、自衛隊の八師団に寄附しようとしたが、皮を張ってなかったで断られ、その後野ざらしで腐んだので焼いた			7月20日	松山神社	夏祭りの時に雨乞い太鼓を叩いた
12	下松山	○	戦前まで	○	太鼓小屋（現在消防のポンプ小屋がある場所）	伊無田の太鼓より大きかった				
13	打越	○	昭和30年位まで	○	区長宅	長胴だった			天祥さん	
14	城	○	城地区では昭和20年8月10日空襲で焼けるまで	○	城地区の中心の消防ポンプと一緒の倉庫に保管されていた、空襲で消失	古老の話では椿原の大太鼓の次に大きい太鼓だった			城地区の弁天堂境内田植えが終りさなぶり祝や悪病よけのお祭りの時に約一週間位楽しかった	城地区の若者達によって太鼓保管の倉庫から出してきれいにふきあげて木の台車に乗せたまま弁天堂の境内まで大勢で引いたり押したりして奉納した
15	馬場	×		×						
16	神山	○	昭和20年頃まで	○	村の青年小屋	面積1m50cm、胴回り長さ3m	森の樫の舟津に舟で着いたと言う	7月15日	西岡神社	集落若者が20人計りで2本の直径5寸長さ5mの丸棒に縦作りして奉納
17	神原	○	昭和19・20年頃まで	○	観音さん	直径1m以上、石橋の太鼓より大きかった		さなぶりの時	西岡神社、山王さん	
18	石橋	○	昭和14、15年頃まで	○	地区太鼓小屋	直径1.2m長さ1.8m		7月24、25日	石橋天神様（菅原神社）	西岡神社に担いで奉納
19	三蔵	○	太平洋戦争前まで	○	坂田さん宅の小屋の中	小型の太鼓		7月15日、9月10日	山ん神様、金比羅さん	
20	扇谷									
21	馬之瀬	×		○	公民館に昭和24、5年位まであったが、払い下げて焼いたらしい	椿原の太鼓位の大きさ				
22	大曲	×		×						
23	鶴見塚	○	昭和32、33年位まで	○	太鼓小屋	太鼓の中に畳を一枚敷いて2、3人が寝れる位の大きさ		さなぶりの時	天満宮	笛や尺八、踊りもあった
24	伊津野	○	昭和10年位まで	○	太鼓小屋に置いていたが、防火水槽を作ったのでお宮に置いた。入札で熊本の人が買った。	宇土郡で伊津野より大きい太鼓は部浦にしかないという話だった。大小二つあった		さなぶりの時	野鶴神社	
25	下新聞	○	終戦後まで	○	お寺の格納庫	上新聞の太鼓とほぼ同型だった			弁天さん 秋祭り田植えあとのさなぶりの時	
26	馬立	○	昭和10年頃まで	○	村一番の地主さんの納屋の中、他地域に売却	今保管されている綱引太鼓2基より直径にして10cm程大きかった		10月18日	白鹿神社（妙見さん）	
27	清辻	○	終戦位まで	○	中村熊彦さん宅にあったが、引越したので現在の甲斐豊宅の石倉に移した。石倉の中は湿気が多いので腐れてしまった	今残っている綱引の二つの太鼓より大きかった。馬立と清辻で一つの太鼓を持っていた		10月18日	2年に一度赤木の山之神さんまで担いで上がっていた	
28	割井川		昭和16年頃まで	○	青年小屋	馬門太鼓より少々大きかった		9月10日	金比羅神社	奉納太鼓は雨乞いのため、部落をあげて行った
29	本網津	×	昭和46年に本網津に転居致した時はなかった							
30	平原			○	観音堂に保管をしていた	棒をくり抜いたものであった、面積1m50cm胴回り2m50cm		7月17日	お親音様のお通夜に叩いていた	お親音様の神輿に奉納していた
31	温	×		×						
32	旭	×		×						
33	橋咲	×		×	太鼓小屋					
34	直臺	×		×						
35	新川西	○	終戦位まで	○	格納庫（近藤さんの裏手に一時置いてあった）	直径1m20、30cm位				
36	駅前	○	昭和13年頃まで	○	笠岩区精米小屋に昭和24年位まで	太鼓は馬門地区の太鼓より少し小さい		10月13日	住吉神社	笛、太鼓に鍾踊り行列があった
37	堤	×	×	×						
38	三丁	×		×						
39	浜通	×	農村では土用の3日に神社参り廻っていた	×	堤の小屋	直径約1m20cmほど		10月13日	住吉神社	
40	住吉	○	昭和10年頃まで	○	区長宅	直径1m20・30cm		8月頃	住吉神社	40人位で持って上がった。近くの地区八つ位の太鼓が上っていた
41	蛸瀬	×		×						
42	小部田	×		×						
43	長部田	×		×						
44	東走	○	昭和18・19年頃まで	○	消防小屋					
45	南走上	○	戦前まで	○	太鼓小屋（南走下と同じ太鼓）					
46	南走下	○	戦前、昭和の初期まで	○	南走上区の太鼓小屋	とにかく一番大きかったと聞いている				
47	三ヶ	×		×						
48	北走	○	終戦後まで	○	区長宅	直径1m以上				
49	西走上	○	昭和30年頃まで	○	区長宅の小屋	太鼓だった				
50	西走下	○	2次大戦頃まで	○	区長宅で保管、鐘有り	直径1m50cm、筒廻り1m80cm、長さ1m80cmくらい		12月13日	将軍神社	笛・鐘・太鼓で錢じこ持った女性20名くらいが踊り奉納された
51	小池	×		×						
52	長浜東	○	昭和15年頃まで	○	長浜神社の中	宇土でも一番大きかった。2mくらい				
53	長浜中	○	戦前まで	○	天満宮の軒下	かなり大きかった				
54	西の2	○	戦前まで	○	長浜天満宮に保管していたが、30、30年くらい前にお宮の改装をしたときに外に出したままになって腐れた			10月25日	長浜の天満宮	太鼓車に乗せて、太鼓を叩いて笛を吹いた
55	西の1	×		×						
56	浦小松	×		×						
57	堂瓜	×		×						
58	新地	×		○	成松さん（元村会議員）宅の蔵小屋に戦後すぐくらいまであった	大きかった				
59	田平	○	昭和2・3年くらいまで	○	地主の墓の横にある地藏さんのお堂に昭和の初めまであった	綱田の中では大きかった				
60	清水	×		×						
61	東	○	昭和20年頃まで	○	地区の堂様の中にあった	子供4名では抱けない位の大きさ			綱田神社	祭りの時
62	上床	○	昭和10年頃まで	○	部落の堂さんの横に小屋を作って保管	寺間や堂間の形と同じで綱田が一番大きかった	上床部落でその昔に作られた		綱田神社	各地区より綱田神社に夕方より集まり夜の明けまで叩いた
63	宮の前	×		×						
64	塩屋	○	昭和15・16年位まで	○	青年小屋	大きかった			綱田神社	綱田で雨乞い太鼓のある全部の地区が集まって叩いた
65	西原	×		×						
66	辺田目東	○	終戦位まで	○	お堂さん、お宮さん	直径1m40、50cm				
67	辺田目西	○	昭和15年頃まで	○	保管庫	長さ2m面積1.2m				
68	古場田	×		×						
69	米の口	×		×						
70	戸口東	×	大正時代まで	×						
71	戸口北	×		×						
72	戸口本	×		×						
73	戸口横	×		×						
74	戸口出	×		×						
75	平岩	×		×						
76	本村	×		○	観音さんの小屋に終戦後くらいまではあった	1m60cm位				
77	松山	×		×						
78	古屋敷	×		×						

第2節 宇土市各地区における雨乞い太鼓

本章では、宇土市各地区において、雨乞い太鼓が如何に行われていたかを、大太鼓が保存されている地域を中心として聞き書き資料を元に報告する。なお、報告は、鹿児島大学比較民俗学研究室の学生が作成したものを基本として、徳丸が改稿を加えた。

1) 宇土・走潟ブロック

平木地区

由来 平木の雨乞い太鼓は宇土の中で最も古く、寛文13（1673）年に作られた赤樗製の太鼓である。太鼓が叩かれていたのは昭和13～14年までであり、それ以後は人手不足や戦争の影響で叩かれなくなり、区長宅に置かれたままとされ、鉦もまた戦争の為に供出されてしまった。

奉納行事 平木地区では他地区と異なり神社への奉納行事は行われなかったが、稲刈りなど水田での農作業がすべて終わった後に、区長宅で来年の豊作を願って太鼓が叩かれる事があった。

組織 太鼓奉納の為の組織と言うものは特にはなかったが、地区の青年団が実質的に太鼓に関わる行事の中心だった。太鼓の皮を張り替える為に故意に破る相談をしたり、修理の為に松橋まで運ぶのもセイネン達であった。青年団への加入年齢は特に決められてはいなかったが、尋常高等小学校卒業後位で全員加入していた。青年団では太鼓に関わる行事の他、2、5、9月の年3回、川瀬神社でサンヤサンの祭礼を行っていた。

技術の継承 太鼓も鉦も区長宅に置いてあった為、雨乞い太鼓も雨乞い踊りも練習は区長宅で行われていた。練習は10歳位から始めて、誰が教えると言うわけでもなく、覚えた人が覚えていない人に教えるようになっていた。鉦、太鼓、笛の役割分担は、特別にあるわけではなく、各々得意なものをやっていた。雨乞い太鼓の叩き方は一種類で、太鼓の両側に一人ずつ、計二人立ち、二人ずつで交替で叩く形になっている。たまに踊っている人が二人の間に入って叩いたりする事もあった。踊りには決まった型がなく、楽しく踊ればそれで良かったと言う。踊りは好きに踊るが、動きをそろえる為に区長宅で稽古をしていた。

管理・保管 太鼓収蔵館が出来る前は、太鼓も鉦も区長宅に置いてあった。太鼓はロープで取っ手の部分を吊って保管しており、太鼓の台は倉庫に保管されていた。

太鼓の張り替え 太鼓が叩かれていたのは太鼓の皮の張り替えの際だった。太鼓には牛の皮が張られており、丈夫な為、普通に叩いているだけではめったに破れる事はない。しかし、太鼓を張り替えた後の宴会を楽しみとするセイネン達が鎌を使って皮を破った為、年に2回も張り替えをした事があったと言う。皮を破るかどうかはセイネン達が相談して決めていたとも言える。張り替えには費用が掛かる為、区長が反対するとセイネン達は夜中にこっそりと破れないように破っていたと言う。皮の張り替えは松橋で行われており、太鼓を大八車に乗せて大人達が曳き、子供らは綱で引っ張っていた。松橋で皮を張ると村中総出で行列を作って迎えに行き、帰り道では、祝いに太鼓が叩かれる。行列の編成は、太鼓を先頭に笛と踊り手が続く形になっており、鉦は太鼓から吊してある。太鼓・鉦・笛の奏者達は法被を着て、編笠を被って化粧をし、踊り手の人達は手に陣太鼓を持って、樗を掛けて蓑笠を被り化粧をする。男性が主に参加し、皆、化粧をしている為、誰が誰かは判別が難しかったと言う。女

性達は主に区長宅でのシマイイワイの準備にあたっていた。この行列の通る道順は決まっておらず、朝に松橋を出発して、宇土本町を廻って、平木へは夕方になって帰って来る。道の途中で依頼があると、依頼者の家の戸口に行って太鼓を叩いて「お花」（ご祝儀）を貰う。依頼を受ける前に戸口で太鼓を叩いて「お花」を要求する事もあった。こうして集められた「お花」は、太鼓の皮を張り替える代金の足りなかった分に回された。平木に戻ると区長の家でシマイイワイを行った。

（調査者：上原陽平、畝原久美子）

松原地区

由来 松原では太鼓の事をドラ（銅鑼）と称する。胴が太鼓に比較して短く、皮の部分を天地になるように置き横打ちで上面を叩く（写真1）。以前は4人程で首から紐を掛け太鼓を吊して叩いていた。地区では通常の太鼓よりドラの方が歴史が古く、また音が良いといわれ、他地区の太鼓が来ると「オッキャンキャンが来よるばい」と言っていた。

奉納行事 松原のドラは「雨乞いドラ」ではなく、「ムシオイドラ」とされる。田植えが終わる6月頃から7、8月にかけて水田に虫が現れるようになると、村役の決定でムシオイ（虫追い）の期日が決められる。ワカイモンがドラを打ち鳴らしながら村中の田を廻った。ドラの鳴る振動で稲の害虫を落とすのだと言われる。娯楽性の強い行事で、夏場の激しい農作業の慰労の意味もあったと言われる。戦前から既に行われなくなっていた。

太鼓の叩き方

一、道行き

ヨー ドドン ドン・ドドン ドン・ドンドン
リーダーかけ声 ○△ ○ ○△ ○ ○ ○

ヒャーリ・ヒャーリ・ヒヤリ・ヒヤリ
● ▲ ● ▲ ● ▲ ● ▲

ヒャーリリャー・ヨーイガサーヨーイガサー
● ▲● ● ▲ ● ▲

オーホモヒーホモヒャーリガホーニャー
● ▲ ▲ ▲ ●

ヒヤリホールロオー・・・ヒャーリヒャーリ
● ▲● ▲ ● ◎ ◎

ヒャーリヤイ（ヨイショ）ヒャーリガホーニャー
◎ ◎ かけ声 ● ▲ ●

オハーヒ・オハーヒヤリ (ヨー)
 ● ○ ● ○ ○ かけ声○

二、高い山（狂言からの唄で、他の集落から来た笛の先生により伝えられたとされる）

ヨー ドン
 リーダーかけ声 ○

たかいい・やまかあ・ああら・たにんそ・おこを・みればノーイ (アー) ウーりやあ・
 ●▲● ● ▲ ● ●▲● ● ▲ ● ●▲● ● ▲ ● ×× ○ ○ ○

ナスビー・いがノーイ・はなざーかりノーイ・
 ●▲● ● ▲ ● ●▲● ● ▲ ●

あっちもおさあドーンドン (アー)
 ● ▲ ● ● ▲ ○ かけ声

こっちもおさあドーンドン (ヨー)
 ● ▲ ● ● ▲ ○ かけ声

記号凡例

- リーダー右手
- △ リーダー左手
- 打ち手全員右手
- ▲ 打ち手全員左手
- ◎ 打ち手全員両手
- × バチ
- 下線 強く叩く

田仏さんの伝承 昔、宇土が大変な日照りにあった時、田植えの時期になっても雨が降らず、村人は毎日の様に雨乞いの祈願をした。するとある夜、村人達の夢の中で水の流れる音や田植えをする賑やかな声が聞こえ、朝起きて外に出てみると松原の田は満々と水を湛え、青々とした苗が植え付けられていた。村人達はこれを観音様のおかげと思い、西安寺（正安3年曹洞宗大慈寺三世鉄山和尚開基、同寺末寺。本尊阿弥陀如来。現在は聖観音菩薩が本尊）に向かうと、いつも行儀良く並んでいる仏様達が泥だらけになっていた。それから村人達はこの仏様達を「田仏様」と呼ぶようになった。

組織、技術の継承 戦前は独身男性によって構成されていたワカイモンがドラを叩いた。太鼓が保存されている消防小屋の側にワカイモンゴヤと呼ばれるワカイモンの集会所があった。現在のドラの叩き方は平成4年に笛の経験者である大海フジエさんに習い、笛の吹き方も大海さんから教示を受けた。

管理、保存 ドラは普段は消防小屋に保管されていた（現在の国道57号線沿いにあった）。

太鼓の張り替え ドラの皮が破れてしまうと不知火町の堀口太鼓店まで運んだ。男性はドラを叩き、女性は野良着に菅笠で横笛を吹いたりした。その受け取りの帰り道には、「花もらい」と称して南から北へ宇土の本町通りを練り歩き商店から「お花」（祝儀）を貰った。商店側では鼈足の店が「お花」を準備してくれていて、小さな商店で現在の金額に直すと2～3千円、大店ならば2～3万円程度のお金を渡してくれた。店々も互いに見栄を張り合っ
てか賑やかなものであった。

雨乞い大太鼓フェスティバル 現在の雨乞い大太鼓フェスティバルで太鼓奉納の出発点となるのは西安寺であるが、同寺への奉納は以前も行われていなかった。

（調査者：江藤優子、黒木正剛）

築籠地区

由来 雨乞い太鼓の起源や由来、太鼓の製作者や製作場所などは不明である。昭和元年を祝い、集落内の天神様への奉納行事が盛大に行われたが、昭和2年を最後に行われなくなった。天神社の現在の社殿は明治33年に改築されたものである。祭神は菅原道真公で、女像姿の埴山姫大明神が合殿となっている。築籠村は、もと木原町六殿宮の氏子であると伝えられ、六殿宮の配神の一つに埴山姫大明神が祀られている事から、その分神と考えられている。築籠村創立は延宝年間（1674～1684）とされ、当時の細川宇土藩主の勧請によって村の守護神として天神が袋ノ内と窪に祀られたものが、後に現在地に合祀されたと伝えられる。築籠村創立時、名字をもっていたのは朝田家のみであり、天神様は村創立以来、朝田家が代々供え物をして守って来たとされる。

築籠の雨乞い太鼓はドラ（銅鑼）と呼ばれる上から叩く形式のもので、木製の台車にはめ込まれている（写真2）。櫓の一本木を刳り抜いて作られており、面径105cm、胴回り361cm、胴長が68cmである。ドラと太鼓ではドラの方が古いとする者も居る。

奉納行事 集落の全ての家が農家であり、灌漑用水が引かれていなかった為、苗の成長に必要な水の確保を雨水に頼るしかなく、雨乞いの儀礼として大鼓を叩いていた。奉納行事は7月半ば頃に行われ、天神様にドラを奉納していた。奉納行事の頭屋は常に区長が務めていた。奉納は毎年特定の日に行われるのではなく、一通り田植えが済むと行われた。築籠村は隣村の石ノ瀬村から分離独立しており、戸数も20戸程度と少なかった為、村人総出で参加した。衣装は緋の浴衣や白いシャツ、斑点模様のズボン姿に鉢巻きを締め、草履を履いて、手甲（テコ）、脚半もつけていた。特に女性は鳥追い笠を被り、赤い腰巻に櫓を身につけ、笠や手甲には紙製の花をつけていた。使用する楽器はドラと笛で、ドラには鉦は使用しない。奉納行事の際の、参加者の並び方は、特に決まっていなかった。ドラの台車に結ばれた紅白の綱を子供が曳き、大人は笛やドラの演奏をした。雨乞い太鼓の演目はヒヤリと言う一曲のみだった。ゆっくりとした調子であった為、楽器を合わせるのが難しかったと言う。ドラは天神様の境内から出発し、村内は廻らずに宇土の本町を一周していた。宇土の町を歩く際には、普段お得意先になっている酒屋や商店を廻り、「御花」としてお金やお菓子を貰っていた。御花として貰ったお菓子は子供たちが分け合い、お金は大人たちが打ち上げの時に酒を買ったり、ドラの皮を張り替える為の資金に充てられた。笛は青年らが笹から作っており、田植え上がりの楽しみとなっていた。雨乞いの他に楽しみのない農村にとって奉納行事は娯楽であり、交流の場としての役割も果たしていた。青年達にとっては、町へ出て歩く事が嫁

を探す場にもなっていた。

この他にも、日照りが続くと天神様の前でドラを叩く事があったが、その際には笛の演奏はなかった。

管理、保存 ドラは天神様のお堂に置いてあったが、子供たちが遊んで皮を叩き破る事が度々あったので、天井の梁に吊るすようになった。

(調査者：江藤優子、黒木正剛)

2). 花園ブロック

上古閑地区

由来 肥後藩は豊後の大友、薩摩の島津と言う強国に囲まれ、しかも兵も少なかった為、どこから攻められるかも知れなかった。特に宇土は戦国時代以来、陸の戦いにおいても海の戦いにおいても要となる土地であった為、周辺の諸国から攻められる事が多かった。そこで大太鼓をたくさん作り、これを叩く事で敵に兵が大勢いると思ひこませ、敵を追い返した。肥後藩が存続出来たのはこの大太鼓のおかげと伝える。これらの大太鼓が後に雨乞い太鼓として用いられるようになったと言う。雨乞いに太鼓を用いるのは江戸時代に流行したものらしい。太鼓の胴の材料である櫟は大きな筏を組んで緑川の上流から運ばれて来たと伝えられる。

上古閑には大きく綺麗な太鼓と小さな太鼓とがあった。大きい太鼓は直径120cm、胴長190cm、胴廻り457cmで、皮の張り替えの際に発見された太鼓の胴内の記銘によれば、文政元(1818)年8月に本庄村の直助によって制作され、価格は5貫350匁だったとされる。鉦は文政3(1820)年に作られ、価格は1両だった(太鼓収蔵館に収蔵)。

戦時中は太鼓を叩いている暇はないと言う理由から雨乞いは中止され、入札に掛けたらどうかと言う意見も出たが、買い取る人が現れなかったので、那須房雄氏が譲り受け、保管した。氏の家は天井が高く太鼓を天井にすっぽり収められたと言う。その後、昭和61年度の「宝くじ地方助成金」の補助により他地域よりも2年程早く太鼓を復元した。太鼓の修復は松橋の近くにある堀口太鼓店によって行われた(太鼓の内側にこの件に関する記銘がある)。

奉納行事 氏神社などへの太鼓奉納は行われておらず、カワマツリの際に如来禅寺での奉納行事が行われている。

上古閑には三日山如来禅寺(通称如来寺)と言う寺がある。如来禅寺は熊本最古と言われる曹洞宗の寺で永延元(987)年に東大寺僧斎然法師が入宋帰朝し創建された。開山は後鳥羽天皇第三皇子六条宮雅成親王法皇巖義禅師によるとされる。この寺から150m程離れた飛地境内に観音堂があり、その横に太鼓小屋が建てられていた(写真2)。

上古閑では、カワマツリ(川祭り)の際に、この太鼓小屋から河岸に太鼓を運んで叩いていた。カワマツリは田植えあがりの7月中頃(現在、6月の最終日曜日)に行われる。この祭りには、田植えが終わり農作業に一段落がついた後の慰労の意味と、田に植えた稲が良く育つように祈願する雨乞いの意味とが込められている。また、カワマツリが終わる頃から子供たちが川で遊び始める為、川に住む河童たちが子供に悪さをしないように願う水難除けの意味もある。

カワマツリ当日の早朝、地区の幹部が鉦を叩きながら地区中を巡り、カワマツリの開催を告げる。大太鼓が太鼓小屋から曳き出され、区長の家や旧庄屋宅などを巡りながら叩かれ、

人々には酒が振る舞われる。太鼓は車まで木で出来た台車に乗せられ運ばれて行くが、道の途中に石段などがあって台車が使用出来ない時には、如来禅寺の廊下の天井に掛けてある2本の棒で担いで運んだ。最後には如来禅寺の境内に曳き込まれ、太鼓と鉦とが併せて叩かれ、唄や踊りも披露される。

河岸や溜池の湖岸など水辺の数ヶ所に、河童の大好物である胡瓜などの野菜をわらで編んで作った籠に入れて竹竿に吊した供物と、カックリ（御神酒の入った竹筒）を沼や溜池など数カ所に捧げる（写真3）。これは河童が悪さをしないようにする為のものと言う。これらの供物は翌年までそのままにされる。カワマツリはかつては地区中の者が参加して盛大に行われていたが、参加者の減少に伴い地区の幹部が区長宅に集まって行うようになった。しかし、最近のカワマツリへの参加者も減少した為中断している。

上古閑の雨乞い踊りの歌詞

一、ぼんさんしのびは闇がよい 月夜には コリヤコリヤ
頭がぼうらりしゃらりと ノイバアサン
頭がぼうらりしゃらりと
チリガンチリガントッチリガン

二、お前さんとならば何処までも 阿蘇山の コリヤコリヤ
燃え立つ煙の中まで ノイバアサン
燃え立つ煙の中まで
チリガンチリガントッチリガン

三、お前さんを待ち待ち蚊帳の外 蚊に喰われ コリヤコリヤ
七つの鐘の鳴るまで ノイバアサン
七つの鐘の鳴るまで
チリガンチリガントッチリガン

四、お前さんは武士かさむらいか 武士は武士 コリヤコリヤ
こさがにゃくわれるわれぬかつおぶし ノイバアサン
こさがにゃくわれるわれぬかつおぶし
チリガンチリガントッチリガン

五、田植えすまして川祭り あまげうた（雨乞い唄） コリヤコリヤ
がっぱ（河童）も浮かれて踊り出す ノイバアサン
がっぱ（河童）も浮かれて踊り出す
チリガンチリガントッチリガン

六、七夕さんなどどん川ア流れらす あらむぞや コリヤコリヤ
いんかいさんな薬もってかけ出らす ノイバアサン
いんかいさんな薬もってかけ出らす

チリガンチリガントッチリガン

七、鳴き行く雁もさけてとぶ為朝の コリヤコリヤ
弦音高き雁回山 ノイバアサン
弦音高き雁回山
チリガンチリガントッチリガン

太鼓を叩けるのは田植えが始まる6月から、土用覚（立秋）の8月8日までの期間とされた。土用覚を過ぎて太鼓を叩く事は禁忌とされた。田植えが終わって一段落したところから、夕方になるとセイネン達が太鼓小屋から太鼓を曳き出して来て、集落の中のキヤノと呼ばれる広い場所で、鉦と合わせて叩いた。これは娯楽としての行為だった。水が必要な時に雨乞いとしても叩いていた。太鼓を叩くと空気が振動し雨を呼ぶと言う。戦時中にも大砲を撃つと雨が降ったと言う。また、少しでも空に近い高い場所で打った方が雨が降りやすいので山の上の神社などで叩くと言う。水害や火災などに際しても不時呼集の合図として早太鼓、早鉦が打ち鳴らされた。

組織、技術の継承 雨乞い太鼓の中心は青年団である。青年団には尋常高等小学校を卒業すると加入するが、その後、先輩達から見よう見まねで覚えて行った。大正年間生まれの話者が、かつての雨乞い太鼓の伝承を伝える最後の世代であるが、彼らが青年団に加入した当時、戦争が始まった為、戦前の雨乞い太鼓の伝承の多くが継承出来なかった。現在雨乞い太鼓を指導している世代は40～50代であり、伝承の途絶が見受けられる。

太鼓の張り替え 太鼓が破れると、セイネン達から青年団長へ、そして区長へと太鼓張り替えの願出が成され、区長が集落の寄り合いを開いて張り替えの許可が出される。セイネン達は新しい皮の太鼓を叩きたいので、皮が破れる様にわざと力を込めて叩く事もあった。太鼓は不知火町の修理店に持って行って修理してもらう。張り替えが終わると、村中総出で太鼓曳きに赴く。

先に述べたごとく太鼓には台車があるが、台車の両脇に直径5寸、長さ4～5間もある太鼓棒も祝い付けて（結び付けて）、油単を着せた太鼓を叩きながら練り歩く。そしてまず松山神社に参拝する。この後「御領往還」を出て宇土町を巡るが、その際に、商店から「花代」としてお金を貰い、直接太鼓に貼り付けたり、紙に金額を書いて貼り付けたりした。

太鼓を引っ張るのは子供で、叩くのはセイネン、年寄りも踊りを担当した。張り替えの際の行列には女性は参加しなかった。

雨乞い大太鼓フェスティバル かつては、現在の雨乞い大太鼓フェスティバルのように他地区の者と合同で雨乞いをする事はなく、上古閑だけで行っており、山車や御輿を作る事もなかった。現在、フェスティバルの実行委員は雨乞い太鼓保存会の会長が中心となり、30～50代の男性からなる雨乞い太鼓保存会会員や消防団、青年団、地区の女性が結婚と同時に加入する婦人会幹部などによって構成されている。

本来、消防団と青年団は別組織でありセイネンは尋常高等小学校を終えた独身男性だったが、現在は消防団が青年団を兼ねており、青年団には既婚者も含まれている。太鼓を叩いたり運んだりするのは青年団の役目であるが、青年団に加入して2～3年の間は太鼓を叩かせてはもらえず、太鼓が移動する際の綱曳きを務めた。

婦人会は既婚女性によって構成されていて、踊りへの参加は自由とされている。フェスティ

バル前の三日間練習を行っている。フェスティバルでの踊りは、戦前に伝えられていた踊りを基本にして、踊りの師匠に振り付けをアレンジしてもらったものである。太鼓を移動する際には「道行き」を、奉納の際には「雨乞い太鼓」を叩く。現在では子供会の構成員の内、小学校4年生以下の者は伝統的な「雨乞い太鼓」を叩き、5、6年生は創作太鼓を叩くようになっている。

保存会と子供会の構成員は、揃いの法被に白・黒・青の捻り鉢巻きを絞めている。婦人会の構成員は波模様の着物に赤い襷を掛け、赤い飾りのついた女笠を被っている。そして、紅白の房がついたバチを持ちこれを手にして踊る。フェスティバル会場に向かう道行きでは紅白の餅を配っていたが、これは去年から始めた。

フェスティバルの際には、太鼓の胴に「寸志」、「御花」など篤志からの寄付を示す張り紙を多数張り付ける（写真4）。

（調査者：寺園美和、田村広樹）

立岡地区

奉納行事 田植えが終わるとワカッシ（15才から40才までの若者）が区長に太鼓を叩いてよいか伺いを立て、許可が下りると神社まで太鼓を運び叩いて楽しんだ。若い者達の娯楽であった。しかしいつでも許可が下りるわけではなく、許可が下りなかった日の真夜中に若者数人が無断で太鼓を持って行こうとしたと言うエピソードもある。「花もらい」と称して、村中で太鼓を担いでマチまで出向いた事もあったと言う。

管理、保存 太鼓小屋に保管されていたが、それが壊れた後は公民館の廊下に置かれていた。現在は太鼓収蔵館に保管されている。

（調査者：寺園美和、田村広樹）

佐野地区

由来 佐野地区に関しては、太鼓の由来や雨乞い太鼓奉納の概要を地区の方が記した資料が残されている。本報告は、その資料の記述を元に聞き書き資料を併用して再構成したものである。太鼓の胴の内側に記された記載によれば、佐野の太鼓は弘化年間に作成されたもので、その代金は約800匁とされている。太鼓の大きさは直径180cm、長さ250cmで、櫨製である。

奉納行事 雨乞い太鼓は旧暦8月8日の土用納めの行事として地区の坂本観音堂に対して行われる。伝承者によっては、この日をカワマツリの日ともする。カワマツリでは男性が川辺に胡瓜を竹に刺したものや御神酒を捧げる。供物をガワッパ（河童）に捧げる事により水難から身を守る。直会の料理を作る女性は、唾が入るといけないとの理由からシキン（檜）の葉を口に加えて調理した。

午後1時位から山王神社前の太鼓小屋にワッカモン（尋常高等小学校を卒業した未婚者）とチュウロウ（中老）が集合する。鉢巻きを締め、履き物は草履で、ワッカモンとチュウロウとに分かれて太鼓を曳き出す。続いて、長さ3間、直径7寸程の杉の担ぎ棒2本を太鼓の胴にロープでくくり付ける。担い棒は山王神社に収めてあった（大水の為、川の土手の支えとして用い、現在はない）。それから太鼓に紋が染め抜かれた油単が掛けられる。

準備が終わると「小若者」（ワッカモンの内、加入したばかりの若い者）が前方を担ぎ、チュウロウが後方を担ぐ。まず、前方の10名が位置に着き、太鼓を担ぎ上げ台車をワッカモンが曳き出し観音堂まで曳いて行く。途中は、見物人が居並ぶ中を菅笠を被った打ち手が踊りながら太鼓を打ち、横笛や鉦が調子を合わせる。太鼓の叩き方は、「雨乞い太鼓」の一種類で「ドンガンドンガンドンガン」と言うリズムの叩き方である。鉦の叩き方も一種類で、二人が担ぎ後ろの者が「スッカンスッカンスッカンカン」と言うリズムで叩いていた。踊りの参加者は丸い菅笠をかぶり、棒の両端に紅白の飾りを付けたものを持って太鼓にあわせて踊る。観音堂に向かう途中、庭が広い上村家にも立ち寄り、そこで人々が太鼓を叩き、踊りを行い、胡瓜やラッキョウ、梅干しなどを肴として酒を飲んだ。集落の中を通り、観音堂までの坂道を次々交替しながら太鼓を担ぎ上げ、先に小若者が観音堂前に運んでおいた台車に据える。午後2時には観音堂まで到着するが、1時間ばかり身体を休めた後、雨乞い祭りの祈願の儀式が行われ、太鼓を打ち農作物が豊作になるよう祈りを捧げた。

午後4時には帰途に着くが、観音堂の守主である山村家の前までまず下がり、そこで出された酒肴で酒宴を楽しみつつ太鼓を代わる代わる勇壮に叩いた。午後7時30分位には、山村家を出発し、山王神社の太鼓小屋まで再び太鼓を打ちながら戻って行く。日も暮れあたりが暗くなると、ワッカモンは消防用の長提灯を手に足下を照らしながら午後九時位に太鼓小屋へ到着した。

太鼓を叩けるのは8月の土用納めまでで、それ以降は太鼓を叩く事は禁忌とされる。

干天で雨乞いを行う際には、村中が地区のカンノンサン（千手観音）にお参りして太鼓を叩き雨を乞う。「雨もらい」と称される。

管理、保存 普段は雨乞い太鼓は山王神社の入り口近くの太鼓小屋に保存されていた。元は6坪程の広さの瓦屋根であったが、台風により昭和40年に倒壊した為、現在の小さな小屋となった。太鼓小屋の横には椎の太木があったがここにはコゾド（梟）が住み着いていて、子供が悪事をはたらくと「コゾドにかますっど」などと脅された。昔の子供達は遊ぶものがなかったので太鼓を叩くのがとても楽しみだった。その為太鼓奉納が終わり太鼓が太鼓小屋にしまわれても小屋の下から入り込んで太鼓を叩いて遊んでいた。

太鼓の張り替え 太鼓が大きい為、太鼓の皮は破れる事が多く、2～3年毎に張り替えなくてはならなかった。太鼓の張り替えは集落のワッカモンが寄り合いで話し合い、どうしても張り替えが必要な場合は若者頭が区長に張り替えを依頼する。区長は集落の相談役と話し合い、それから村寄り合いとなるが、張り替えには費用が掛かる為、一度の寄り合いでは決まらない事が多かった。太鼓の張り替えが決定すると、不知火町まで太鼓を曳いて行った。明治頃までは職人が出向いて河原で若者達も加勢して張り直していたと言う。張り替えの時期は4月か5月で、ワッカモンも昼間は仕事があるので夜曳いて行った。先に他集落の太鼓が来ていれば何日間も待たねばならなかった。順番が来ると若者が皮を張る加勢に行く事もあった。張り替えには10日間程掛かり、終わると御神酒を備え、試し打ちが行われる。打棒は直径1寸、長さ1尺の桐木に紅白の布を巻き付けた物で、職人の親方、区長、世話役、若者頭の順で試し打ちする。試し打ちが無事に終わると、職人の親方より区長に太鼓が引き渡され、集落総出で台車に乗せた太鼓を曳いて帰途に着く。台車は4寸角の杉材で造られた、高さ3尺5寸、横4尺5寸の四角い台で、それに直径2尺程の丸太を5寸ばかりの厚さに切った松の車輪を付けた物であった。出発と同時に太鼓を打ちながら、途中、松山神社に奉納打ちを行い、それから宇土本町方面に出て、一里口を經由して本町城ノ浦まで各商店や病院な

どを打ち込んで廻り、「お花代」をいただく。佐野には夕方到着し、太鼓を威勢良く叩きながら山王神社前の太鼓小屋に到着する。

(調査者：寺園美和、田村広樹)

3). 轟ブロック

椿原地区

由来 椿原では明治17年の8月に太鼓を購入した。太鼓は樺の大木をくり抜いてつくられたもので、阿蘇から屋曲までの間を筏で運ばれた。非常に高価な物で、「太鼓を買って結婚を三年延ばす」と言われる程であった。鉦は、京都から持って来たものと言う(写真5)。

70年位前(昭和の初期の頃)、椿原と恵里は持っていた太鼓を交換した。理由は太鼓と村の大きさが合わなかったから、つまり大きな村であるのに小さな太鼓を持っていた椿原と、小さな村であるのに大きな太鼓を持っていた恵里とが話し合い、椿原の太鼓は恵里へ、恵里の太鼓は椿原へと移ったと伝えられる。一般的には、太鼓は大きければ大きい程良いとされ、大きな太鼓を所有する事は、それだけで村の立派なステータスともなり得たと言うが、恵里との交換では他に条件が出される事はなかったと言う。

太鼓の奉納は戦時中も行われていた。太鼓の張皮が破かれる事件などもあったが、その後、村人たちは破損した太鼓の中に小さな太鼓を入れ、それを巨大なビニールで覆い、隠れて雨乞い太鼓の奉納を続けていた。終戦後は数年間太鼓奉納も行われなかった。昭和23年ころにも太鼓の片面の張皮が破れたが、その後も皮を繋いだり、片面だけ叩いて使った。戦後になっても太鼓の奉納は続いたが、昭和26年6月26日の奉納は大洪水の為、一度椿原八幡宮に上げた太鼓が降ろせなくなった。2年後の昭和28年、太鼓は再び破損したが、戦後まもない当時、まだ日本は物質的な豊かさを取り戻しておらず、儉約と質素を重んじる風潮があった。その為、賑わいと暴飲暴食を重ねる太鼓祭りに反対する意見もあり、以降、椿原大太鼓は傷付いたまま、椿原八幡宮の中にしばらく吊される事となる。昭和48年、椿原の太鼓は無形文化財に指定された。この時に太鼓の皮が張り替えられた。かつては毎年行われていた太鼓奉納も、この年から村の人口不足の為、3年に一度の奉納となった。平成2年には竹下内閣の「ふるさと創生資金1億円」によって太鼓の革が貼られ、45年ぶりに椿原大太鼓が復活、同時に造られた宇土大太鼓収蔵館に収められた。

奉納行事 雨乞い太鼓の奉納は、干天の雨乞いとして行っていたわけではなく、集落の若者たちの娯楽的な要素が強かったと古老たちは語る。また、田植え終わりをサナブリと称するが、苗の根付けを祈願する為に行っていたとする話者もいる。奉納の期日は決まっていたが、だいたい新暦で7月中旬位に行われた。

集落の祭礼では、通常区長がその中心となるが、太鼓奉納だけは若者たちが中心となって行われた。太鼓の担ぎ手、叩き手は集落の若者(男子)、笛は女性、踊りは女性を中心に飛び入りの参加もあった。鉦は誰が叩いても良いとされた。忌みなどで、参加を制限される者は特になかったと言う。

一日目は根付け祭り、サナブリマツリと称される。現在では太鼓は轟水源の記念館に保存されているので、約1kmを台車に乗せて集落の氏神である椿原八幡宮まで曳いてくる。椿原八幡宮の境内は村の中の小高い丘の頂上付近にある。同社は通称「三宮さん」とよばれる三

つの社のうちの一つで、残りの住吉神社、西岡神社と並んで称されるが、現在は西岡神社の末社である。頂上までは階段があり全部で83段、横幅が狭く急勾配で、しかも苔むして非常に滑りやすい。ふもとの階段の入り口には小さい鳥居が立っている（写真6）。椿原八幡宮の前で、大太鼓を地面に置き、「木星」と呼ばれる飾り物のうち上に来る特定の四つを抜きとる。そこに担い棒2本を据え、5、6人の男たちが1時間程かけて、太鼓と棒とをロープで固定する。ロープの結び方は独特のもので、伝承者が指揮をとって、若者たちが結ぶ（写真7～16）。完成すると、30～40人程の若い男たちが担い棒を手で持ち上げて、八幡宮の鳥居をくぐる。鳥居は小さく太鼓がくぐるにはぎりぎりなので、くぐり抜けた時はひときわ大きな喝采がわき起こったと言う。太鼓はかつがれたままこれらの障害を通り抜けて境内まで運ばれる。83段の階段の左右は樹木が茂っており、もし重量2トンの太鼓を落としてもしたら逃げ場はなく、怪我は避けられない。そこを担ぎ手たちは「よいさー、よいさー」と言う掛け声をあげながら一段一段登りつめて行く。登りには、背の高い者が後ろに付き、下りにはその逆になって、肩の高さをそろえて、太鼓が出来るだけ水平になるようにする。また、境内からは村の老若男女が別のロープで太鼓の曳き上げに加担する。

無事境内にあげられた太鼓は社の周りを3度廻る。そのあとヨコガブリを行う。これは太鼓の両脇に3人ずつが新たにならび、彼らがそれを押し合い引合う事で今にも倒れると言う程太鼓を左右に大きく揺ると言うものである。これが済むと、神事が行われ、あとは盛大な酒盛りが一晩中続けられる。この時には班や家ごとに作った饅頭やキュウリの梅酢漬けなどが出され、どの家の嫁のが上手だなどと品評するのも楽しみだった。酒は自家製でドブザケ（濁酒）と甘酒を混ぜたものだった。奉納された太鼓は交替で夜通し叩かれる。あわせて笛が吹かれ、鉦が打たれる。それらは昔から当地に伝わっている「雨乞い踊り」や「ねんねこ踊り」の節で奏でられ、賑やかな中、村人は饅頭などを肴に酒を飲み、唄い、踊る。踊りや笛は専ら女性によってなされていた。「雨乞い踊り」や「ねんねこ踊り」にはたくさんの替え歌も存在していた。「ねんねこ踊り」は宇土が貧しく、薩摩街道の金山へ金掘りに行ったと言う意味の唄である。

「雨乞い踊り」は房の付いたバチを両手に持ち、正面を向いて右足を上げ、左足を下げる。足を下げる際にバチを下に降ろし、足を上げる際に上を向いてバチを廻す。左を向いて同様の所作を行い、続いて右を向いて繰り返す。

「ねんねこ踊り」も、途中までは「雨乞い踊り」と全く一緒だが、数回、その所作を繰り返した後、バチを後ろ手に組んで赤ん坊を背居う所作をして前列の者が後ろに下がり、後列の者が前に出て来て入れ替わる。それから再び「雨乞い踊り」と同じ所作を繰り返し、幾度となく前後が交替して続けられる。

女性は遅くなると家に帰るが、若者は夜詰めと称して一晩中全員残った。椿原に隣接する宮庄集落では、一晩中太鼓の音が聞こえ、それを聞くと田植えが終わったのだなあと感じたと言う。

二日目は総祭りと称され、豊作祈願の祭りともされる。この総祭りでは、太鼓を椿原八幡宮から降ろす。境内で太鼓をヨコガブリしたあと、踊りの奉納が行われる。男性、女性を問わず、「雨乞い踊り」「ねんねこ踊り」「銭太鼓」を笛、太鼓にあわせて踊る。これらの踊りは、太鼓のバチを持って踊る打ち込み踊りである。（銭太鼓は難しい為現在では行われていない）。その後、再び階段を降り、小さな鳥居をくぐる。登るより降りる時のほうが危険で、現在では担き手は保険に加入してから祭りに参加する程である。無事に階段を降りて鳥居を

くぐったときは、再び大きな喝采が起こった。天候が雨の時には階段が滑って危険なので翌日に延期する。かつて十日間雨が降り続いた事があり、その間、夜詰めの差し入れの費用がかさみ、早くやんで欲しいと願った事もあったと言う。

雨乞い太鼓や雨乞い踊りを奉納する機会はサナブリ時期以外にはなかった。太鼓の張り替えの時に叩いたりした。

組織 太鼓に関わるのは若者中心であった。昭和30年までは、青年団が村の行事を執り行っていた。青年団には尋常高等小学校卒業後加入し、結婚すると脱退した。終戦後すぐのころは、若者が帰ってきて青年が40名程居た。

技術の継承 練習や指導は特にはなく、人が叩いているのを直接、見聞きして憶えて行く。笛などは個人的に練習していた。太鼓の叩き方には2種類あったと言うが、詳細は不明。太鼓の担ぎ棒をロープで括るには特殊な結び方を知っている必要がある。2時間程かかる昔から伝えられた結び方で、3年ごとに若い世代へと交代して行き、一緒に結びながら憶えて行く。

管理、保存 太鼓は、使われない時には太鼓小屋に保存されていた。戦後5、6年は八幡宮に奉納されたままだった。

太鼓の張り替え 太鼓の皮の張り替えは不知火まで運んで行った。皮の張り替えには多額のお金がかかるので村の人は反対したが、若者が勝手に持って行って、結局お金を払うしかなかった。この張り替えも若者にとっては一種の娯楽であった。太鼓の皮を張り替える際に試験的にニス塗りを試してみた事もある。太鼓の胴の塗り直しまでは行わなかった。

(調査者：田中 聡、道免紀子)

飯塚地区

由来 現在、飯塚にある太鼓は明治20年頃、宇土郡神浦（こうのうら）から購入したものと伝えられる。かつては太鼓の奉納は年2回行われていたが、昭和17年位から規模が縮小し始め、戦時中には男性の出征により奉納も難しくなり、戦後には行われなくなった。飯塚には戦前、地主が幾人か居り、村人に田を貸して徳米を徴収していたが、戦後の農地解放で衰退した。太鼓祭りの運営資金は彼らの寄付によるところが大きかったので、これも太鼓奉納が衰退した理由の一つとされる。

終戦後には何者かが太鼓の皮を破る事件が起こった。そのまま太鼓は太鼓小屋に3～4年放置されたが、後に青年小屋に移されて消防ポンプなどと一緒に保管された。昭和23年頃に太鼓を天神様に移そうと言う事になり、祭りも兼ねて太鼓を天神様の境内まで運び、そのまま平成2年まで置かれていた。太鼓には檜の車軸、松の車輪が用いられた杉製の台車もあったが、これも腐ってしまった。

奉納行事 7月の始め、田植えが終わるとサナブリが訪れる。この頃になると、セイネンや子供が太鼓を小屋から出して叩き始める。そして、7月5日と25日とに豊作や順調な降雨を願って天神様に太鼓を奉納していた。特に7月5日は何日か続けて太鼓を叩いていた。25日は天神様の祭りで、かつては毎月の25日が天神様の祭りとされていた（戦後は11月25日のみとなる）。

奉納では、まず太鼓に担い棒を2本結わえ付ける。これには独特の方法があって、荷造りの上手い馬車人夫などが携わる。太鼓の上には指揮をとる者が乗って、6～7人の結び手達



写真4 大太鼓に貼られた
「お花」(上古閑地区)



写真1 ドラ(松原地区)



写真2 ドラ(築籠地区)

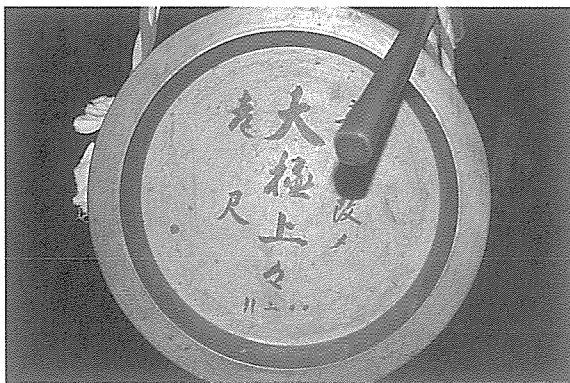


写真5 鉦(椿原地区)



写真6 椿原八幡宮の石段



写真3 カワマツリのカックリ
(上古閑地区)

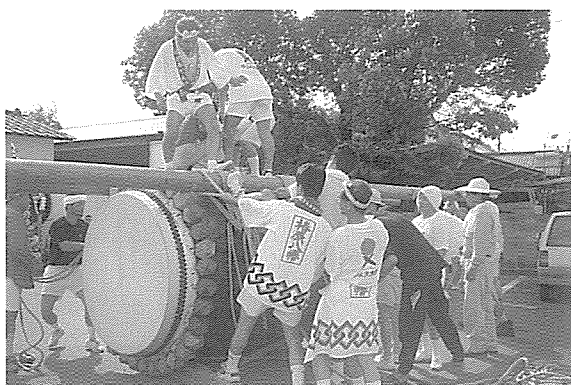


写真 7

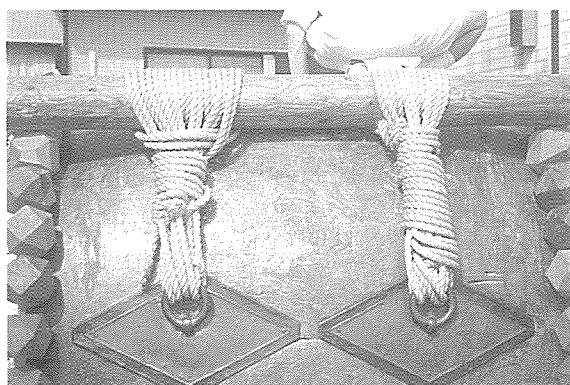


写真 12

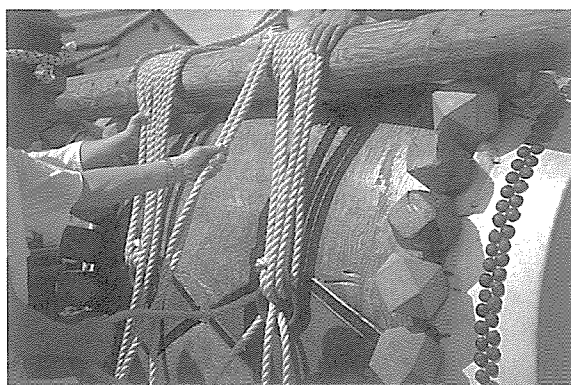


写真 8



写真 13



写真 9



写真 14



写真 10



写真 15

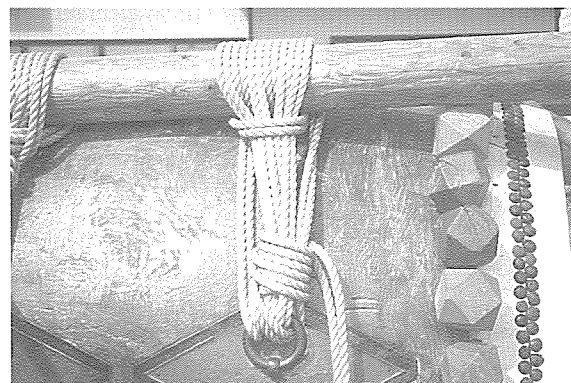


写真 11



写真 16

写真 7～16 太鼓に担い棒を結び付ける過程（椿原地区）

に指示を出す。これらは太鼓を打ちながら行われる。

担い棒の固定が終わると、今度は天神様へ太鼓を運ぶ。25～26人の男達が太鼓を担いで1km程の道のりを歩き、10段程の緩い階段を登って境内に入る。担げない人は、太鼓に結ばれたロープを曳いて、担ぎ手達を助ける。その間、鉦と横笛が演奏され続ける。曲目は、「ねんねころころ」、「雨乞い踊り」などで、鉦は10才程の男の子が担当し、横笛は女性達が担当した。菅笠を被り、赤い衣装を纏った女性達が踊り手であったが、男性が混じって踊る事もあった。

太鼓が天神様の境内に入ると、左右に大きく揺するヨコガブリが行われる。それから社の周囲を3度廻り、担い棒を付けたまま奉納される。これから先は女性は参加出来ず、男性達だけで太鼓を夜通し打ち続け、饅頭や酒を楽しむ。子供達もお菓子などでお籠もりをした。この時には唄や踊りはない。

翌日、太鼓は天神様を降り、夫長の家に運ばれ、そこで村人全員による総踊りが行われる。天神様へ太鼓を奉納する際には、集落の地蔵の前でも太鼓を奉納した。

干天で困窮した際に、奉納行事とは別に太鼓を天神様まで運び、雨乞いをした事もあったと伝えられる。太鼓を叩くのは夏で、彼岸を過ぎると嵐を呼ぶとして嫌われたが、厳密な禁忌ではなく、11月25日の天神祭りにも太鼓と鉦が天神様へ奉納されていた。

組織 村の筆頭は区長であり、その下に世話役が4～5名付き、評議で村の行政を取り仕切っていた。区長・世話役の任期は何れも2年で選挙制であった。正月第二日曜日が初寄合いで村の一年の予定を話しあった。また、村には青年クラブがあり、男子は尋常高等小学校を卒業すると（後には中学2年になると）全員強制加入させられた。脱会は結婚時であった。青年クラブでは年少者は年長者に絶対服従であり、水当番などは年少者が総て行った。拠点は大鼓小屋横の青年小屋で、太鼓に関わる行事は区長、世話役の下、青年クラブが中心となっていた。

管理、保存 鉦は現在では区長宅に保管されている。祭りの際、大太鼓、横笛に並ぶ大事な楽器であるが、かつては村内の連絡にも用いられた。鉦を一つ打てば集合、素早く連打すれば災害の知らせであった。

太鼓の張り替え 太鼓奉納は村の重要な祭りであり、若者達にとっては数少ない娯楽であった。太鼓の皮は、打ち過ぎや、何者かに切り裂かれて破かれると、若者を中心として太鼓を修理したいとの声が必ずわき起こった。村の財政は個人が所有する農地の反数割で村費を納める「反等割」で賄われていたが、太鼓の修理は村にとって大変大きな負担であった。その為、村の役職者達はあまり太鼓の張り替えをしたがらなかった。若者達は、張り替えが認められなくとも黙って太鼓を持ち出したりして事後承諾を求める様な事もあった。太鼓の修理が村で決まると、村中の人々総出で松橋町の本所商店へ太鼓を運んだ。近隣の椿原と合同で、馬車に太鼓を乗せて運んだ事もあった。本所商店に着くと村人も泊まりがけで皮の張り替えを手伝った。手伝う事によって太鼓の張り替えに必要な職人の数がおさえられ費用も安くなった。湿らせた牛の皮を太鼓の胴にのせ、上に大勢の人が乗って踏みながら周囲を引っ張り、胴に張って行く。張り終わった太鼓は飯塚までの帰路、宇土の旧道を通り、「花貰い」を行う。道沿いの商店一軒一軒に太鼓を打ち込んで商売の繁盛を祈願する。店では「お花」（ご祝儀）を渡した。このようなやり方で最後に張り替えたのは昭和12年と言う。

（調査者：田中 聡、道免紀子）

石橋地区

由来 由来は不明であるが太鼓は集落の象徴であると考えられている。戦前は太鼓奉納も行われていたが、戦後は太鼓の皮が裂け、それを補修する費用の捻出も難しく奉納は中断した。

奉納行事 二十日土用の入りから約一ヶ月間が収蔵庫から太鼓を引き出して叩く期間であり、田植え仕舞いのサナブの際にも必ず太鼓を叩いた。また、7月23日には三宝院の鎮守観音へ奉納し、24日には集落背戸山に位置する集落の氏神である天神（後述）に、翌25日には西岡神社へ奉納していた。天神では共同飲食をしながら、一晩中太鼓を打っていたのでこれをオツヤ（お通夜）とも称した。奉納の際には太鼓を2本の担い棒の両側から押し合いをしながら担ぎ上げ、押しつ戻りつして太鼓をもんだ。各家庭からは料理が出され、他の集落からも酒の差し入れなどがあった。太鼓を叩くのは主に青年団であった。

管理・保存 太鼓の収蔵庫は三宝院の下にあった。

技術の継承 太鼓は教えるものではなく、自然に受け継がれて行くもので、子供の頃から太鼓を叩いて、慣れ親しむ事により自然と叩けるようになった。太鼓の担ぎ方などで、先輩から怒られて教える事もあった。

太鼓の張り替え 太鼓の皮は、よく何かで切られたように裂ける事があった。青年団が皮の張り替えを反対されて、悪戯で切ったものらしい。太鼓の皮の張り替えは区長と年輩者との話し合いで決められた。不知火町松橋で張り替えたが、不知火で鳴らした太鼓の音は、石橋まで聞こえてくるとも言われていた。皮の張り替えが終わると行列を組んで、太鼓を叩き、雨乞い踊りを踊って帰って来た。太鼓には紅白の布が掛けられ、胴には「お花」（ご祝儀）ののし袋が沢山貼り付けられた。氏神へ太鼓を運び太鼓を叩いて奉納した。その際には鼈舁にしている酒屋などから酒の差し入れがあった。

太鼓の里帰り奉納について 1999年8月1日、石橋地区において「雨乞い太鼓」の「里帰り奉納」が行われた。区長を始めとする石橋地区の太鼓保存会、及び住民の熱望により、現在、熊本大学工学部応援団の太鼓として用いられている大太鼓を里帰りさせる企画である。太鼓が熊本大学へ移った事情は明らかではないが、そこで行われた太鼓奉納はかつての奉納行事を彷彿とさせるものであった。前述のごとく、石橋地区では昭和15年位まで7月24日に地区の裏山に位置する石橋天神様へ、25日には西岡神社へ太鼓奉納を行っていた。今回の奉納では、地区にとって最も親しみ深い神である石橋天神への奉納が行われた。石橋天神は集落の背戸山の中腹に位置する直径30m程の鬱蒼とした森である（写真17）。森への入り口には石の鳥居があるが、社殿などは設けられておらず、中央に注連縄の巻かれた神木が屹立し、その横には天神像が線

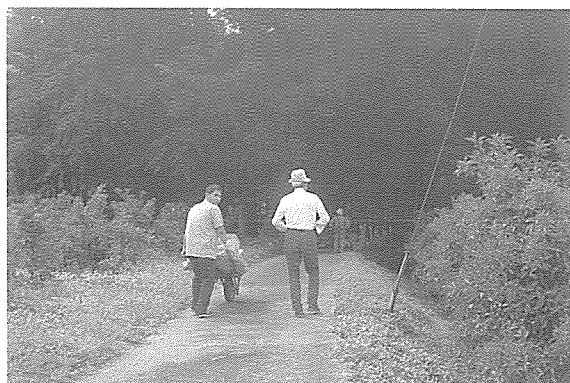


写真17 天神の森（石橋地区）



写真18 神像が線刻された岩（石橋地区）

刻された高さ1 m程の自然石（写真18）がある。自然石の前には数多くの蠟燭が奉納されている。天神の境内は、神木と岩座を伴う神社以前の古態を残した祭場であり、森全体が神聖視される、いわゆる「森神」である。以下、奉納の経過を写真で解説する。

写真19 午後1時位には太鼓が轟水源前の公園に運ばれていた。赤く胴を塗られた太鼓には、「石橋大太鼓」と染め抜かれた油単が掛けられている。地区の老人達が懐かしげに太鼓を叩いて、その響きを確認めている。



写真19 太鼓と油単（石橋地区）

写真20～25 太鼓に担い棒を結び付ける過程（石橋地区）



写真20



写真21

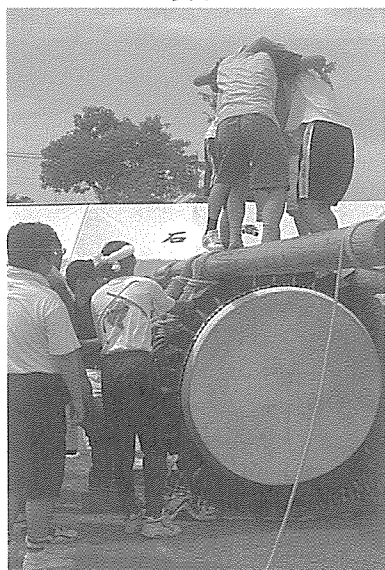


写真22

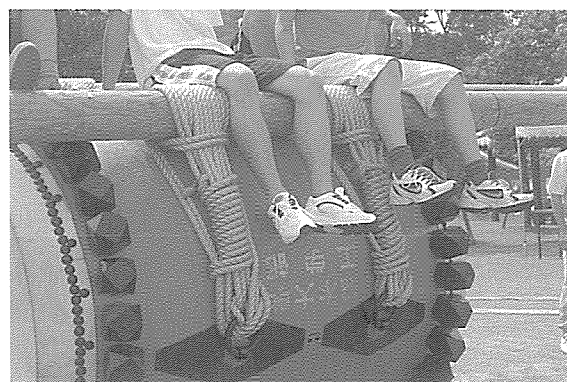


写真23

写真20～24 やがて石橋と椿原の太鼓保存会の会員と若者達が集まって来て、台車から降ろされた太鼓に担い棒2本がロープで結びつけられる。担い棒を結び付ける方法は椿原地区の方法に従っている。4人の若者が太鼓の上に乗って、ロープを踏みしめながら締め上げて行く。

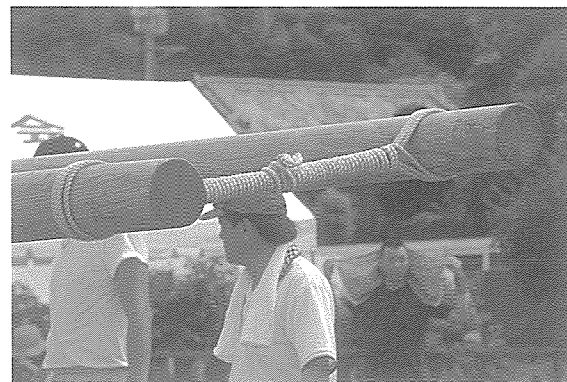


写真24

写真25～26 太鼓を担い棒を下にして裏返し、再び台車に乗せ、油単を飾る。担ぎ手は揃いの法被を身に纏う。



写真25



写真26 揃いの法被を身に纏う（石橋地区）

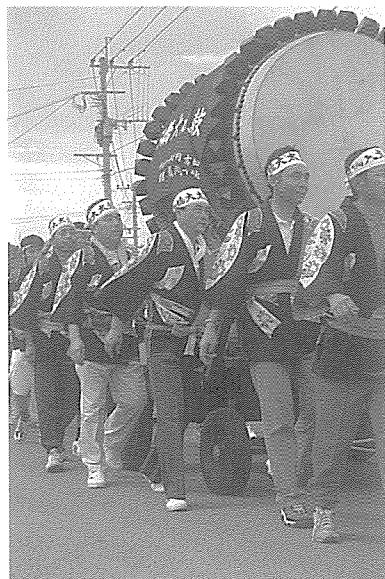


写真27 太鼓を台車に乗せ
天神へ運ぶ（石橋地区）



写真28 行列の鉦（石橋地区）

写真29～30 山麓で台車から太鼓が降ろされ、ここから総勢30名程で天神の祭り場まで担いで登って行く。真夏の炎天下、急坂を登るのは、相当の重労働であり、全員が汗まみれになって太鼓を運ぶ。



写真29 太鼓を台車から降ろし担いで登る（石橋地区）



写真30 天神の森へ向かう雨乞い大太鼓（石橋地区）



写真31 鳥居をくぐり、境内に太鼓を入れる（石橋地区）



写真32 天神に集う人々（石橋地区）

写真31～33 天神の鳥居にぶつけないように用心深く境内に運ばれた太鼓は、神木の右脇に据えられ、注連縄と竹笹が飾られる。祭壇へは鯛、米、野菜、果物、酒、塩などの供物が供えられる。その後、神官の祝詞と祓いが奏され、祝宴が行われた。

（調査者：山口宏樹）

宮庄地区

由来 宮庄は世帯数120軒程の集落で、集落内には、細川氏ゆかりの轟御殿跡、轟水源、宇土大太鼓収蔵館がある。現在、宮庄は緑川から農業用水を引いているが、かつては轟水源からの用水が主なもので、それ以前は天水だけに頼っていたと言う。その為、雨乞い太鼓の奉納も盛んだったとされるが、昭和18年には人手や物資の不足で一旦途絶えた。戦後、昭和26年に一度だけ太鼓奉納が行われたが、その後何者かによって張皮が破られて、奉納は行われなくなり、青年小屋に置かれていた。青年が太鼓の由来も知らずに火鉢の代用にしようとした事などもあり、集落のチュウロウ（中老）たちが火鉢を買い与えて、太鼓は集落の宮庄八幡宮の社殿の中に吊し、保管する事にした。太鼓の皮を昭和12年位に張り替えた事が記憶されているが、浜田の堀口、宮村両氏に張り替えをたのんだと言う。太鼓は櫓の台車に乗せて運んで行った。太鼓の皮を破いた場合は、破いた者の家が弁償しなくてはならなかった。

奉納行事 宮庄の太鼓奉納は宮庄八幡宮で行われる。八幡宮には鳥居はなく、17段の階段を登ると境内に出る。社殿は前後二重構造の建築で前半は公民館、後ろ半分が社になっている。社の背部には細長い注連縄が張られている。御神体は小さな石に注連縄を巻いたもの。この八幡宮も椿原と同じく西岡神社の末社とされる（写真34）。

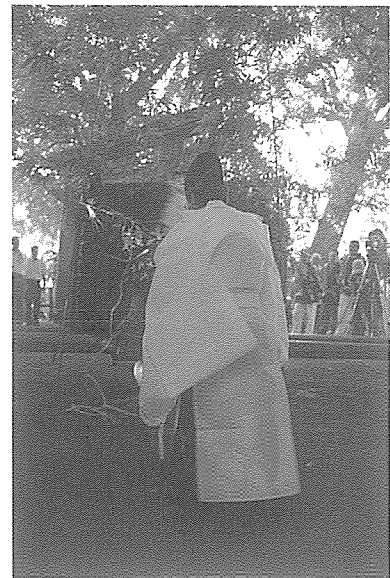


写真33 神官による神事（石橋地区）



写真34 太鼓が保管されていた公民館（宮庄地区）

六月がすぎ、田植えが終わるとサナブリ（根付け祭り）が行われる。若い男たちが消防ポンプなどと一緒に太鼓小屋に保管してある太鼓を出してきて、担い棒2本を縄で固定する。この際にはシラベと言う竹の棒で縄を絞める。その後、担いで宮庄八幡宮まで運ぶ。「さーよい、さーよい」の掛け声で17段の階段を上る。境内までたどり着くと、社の周囲を3回廻り、左右に大きく揺り動かすヨコガブリを幾度も行った後、太鼓を奉納する。一晩中、太鼓は交替で打ち続けられ、共同飲食が行われる。太鼓は決まったりズムで打たれるが、集落の男性は眼や耳でその調子を憶えているので、交替しても太鼓はきちんと打たれ続ける。宮庄太鼓は桐のバチを使うのが特徴と言う。横笛や鉦も鳴らされ、唄や踊りがなされる。横笛は特に難しく、他の楽器はこれに合いの手を入れるように奏でられた。唄には「雨乞い踊り」、「ねんねこ」、「坊さんしのび」、「高い山」などがあったと言う。これらの唄には、集落や唄い手によって替え歌や、ちょっとした節回しの違いがあったと言う。

「ねんねこ」は少し卑わいな内容の替え歌もあったと言う。「高い山」は子供が口ずさんだりする事が多かった。

「ねんねこ」歌詞

ねんねころころ やそべえどの やそべえが とっちゃんたちや
どこに行かした 薩摩街道に 金（かね）堀りに 金がほれんとして（一部不明）
おまん（女の子）泣くなあ 船のすぐ 船は何処船 おざか（大阪）船
おざか土産に 何もろた いちでこわく にで（一部不明）
さんで薩摩のいたおこし 板をもみもみ食べいらっしやい

「高い山」歌詞

高い山から 谷底みれば のいばあさん うりやなすびの はなざかり
（ここまでお祖母さんが唄い、以降は孫が唄う）
あっちも多さ どんどん こっちも多さ どんどん

踊りは房のついたバチを両手に持ち踊る。女性だけでなく男性も踊ったが、男性は性的な所作含めた踊りをユーモラスに演じていた。

翌日、太鼓は再び社殿を3回廻って境内から降ろされる。

太鼓は娯楽の少ない集落の、数少ない若者の楽しみであり、祭り以外でも子供たちがおもちゃがわりによく叩いていた。しかし、立秋が過ぎて叩くと嵐を呼ぶと言う事で、それは禁忌とされた。太鼓も笛も神につながっている所以、ざらに（なんでもない時に）打つ事は忌まれた。

組織 雨乞い太鼓の八幡宮への奉納はかつては、集落の消防団と青年団が中心となっていて行われていたが、現在では区長がリーダーとなり、雨乞い太鼓保存会と子供会が中心となっていて行われている。

太鼓の担ぎ手はすべて男性と決まっている。担ぐのは40名位で、夜詰めの際の太鼓は代わる代わる全員で叩く。男性は16才から結婚するまでは強制的に青年団に加入させられた。村の行事の経費は村が持ったが、実際の活動に携わるのは青年団で、太鼓祭りも同じであった。

太鼓は太鼓小屋に納められ、管理は青年団員が当番で携わった。なお、結婚して青年団を脱退しても、消防団に入って太鼓を打ち続ける人も居た。

女性は太鼓祭りでは雨乞い太鼓を境内から降ろす総祭りにのみ参加が認められた。夜詰めの際の酒の肴や、茗荷饅頭などは女性が差し入れた。差し入れの一品目は各家庭で作り、二品目を婦人会などで集まって作った。戦時中は砂糖の配給が十分でなかった為、白砂糖を使って饅頭を作れるのは、かなり裕福な家であった。また、当時は女性が神社の境内に入る事や、神事に関わる事は許されていなかった為、夜詰めには参加しなかった。

鉦の役割 鉦は奉納の楽器としての用途の他に、二つの使われ方があった。ひとつはハヤガネ（早鉦）で、村内で洪水や地震・火事など災害が起こった時に、いち早く人々にそれを伝える為に鉦を連打する用い方である。今ひとつはヨケやクヤクを知らせる為の用い方である。ヨケとは区長が許可して決められる村の公然とした休暇の事で、朝に「かーん、かーん、かん、かん、かん…」と鉦を打ち、その日の昼から休み始め、それから2、3日休日となった。クヤクの際には「かーん、かーん、かーん」と3回打つ。

（調査書：田中 聡、道免紀子）

伊無田地区

由来 伊無田は川が近い為、水不足で困る事はなく、「太鼓祭り」は豊作祈願や娯楽としての意味が強かったと言う。鉦には、「肥後宇土松山手長伊無田村若者中 文化十三年丙子歳二月吉日西村和泉守」との記銘がある。二つあるので「夫婦」鉦と呼ばれている。村の世話役が江戸まで買いに行き、そこの職人の奥さんが金の簪を混ぜたので金が入っていると伝えられ、普通の鉦と違って音に余韻があると言う。鉦の手入れは「黄金草」と呼ばれる草（研草か）で表面を磨いて、吉野紙で拭き上げる。この二つの鉦を同時に打たねばならないので難しい。太鼓に掛ける油単は明治45年に作ったもので梅の紋が染め抜かれている。

太鼓は消防ポンプなどと一緒に太鼓小屋の中に納められているが、田植えが終わると曳き出され、ヒャゴヒャゴと言う夫長（後述）の家での祭りと八幡宮への奉納である宮籠もりとに用いられていた。神社への奉納は昭和21年に何者かが太鼓の片面を切り裂いた事件が原因で途絶え、ヒャゴヒャゴも数年後に行われなくなり、その後太鼓は八幡宮に吊された。太鼓が修復されたのは平成2年のふるさと創成資金が交付された際なので、40年近く八幡宮に吊されていた事になる。

奉納行事 田植えの終わりをサノボリと称すが、それから1週間程たったころヒャゴヒャゴを行う。夫長の家には太鼓を持ち込み村中の人々が集まって共同飲食し、田植えが無事終わった事を祝う。夫長は別名「鳶役」とも言う。「区長」、「副区長」とあわせて「三役」と呼ばれるが、その中で最も権威を有する役目とされる。村を統制するばかりでなく、区役や出納も司る。任期2年の交代制で務められた。夫長の家では、太鼓を打ち、鉦を叩き、横笛を吹く。この時女性の参加も認められたが、太鼓を叩くのは男性に限られた。

ヒャゴヒャゴが終わると、太鼓を集落の天神様へと運び太鼓奉納を行う。この太鼓奉納が「宮籠もり」と称された。太鼓は担い棒に結わえ付けられ、集落の男達によって天神様の境内まで運ばれる。太鼓は独特な方法で結わえ付けられ、この結び方が悪いと太鼓は落ちてしまう。集落の子供達があらかじめ台車を天神様へ運んでおき、後から男達が太鼓を担いでやってくる。この際には太鼓と鉦が叩かれるが、笛は吹かれない。女性達は太鼓が天神様に奉納

されるのを眺めるだけとなる。

太鼓が天神様の境内へ上る際には、早いテンポで叩かれる。この打ち方はハヤガケと称される（ただし、異説もあり、「雨乞い太鼓」のテンポを早くしたものがハヤガケで、特別その曲がある訳ではないとする説もある）。

太鼓は天神様の境内に到着すると社の周囲を3度廻る。その後、太鼓の担い棒の片側にセイネン達が、もう片方にチュウロウ（中老）が各々分かれて付いて互いに押し合う。セイネン達とチュウロウ達の力比べの様な形で太鼓は大きく揺れる。後年、集落が若者不足になった際には、チュウロウの人数ばかりが多くなり、セイネン側が太鼓ごと山へ押し込まれた事もあったと言う。

以上の儀礼が終わると、太鼓は先に子供達が運んでおいた台車に据えられて、一晩中交代で打たれ続ける。男達は朝まで唄や踊りを交えて祝宴を続けるが、女性は境内には入れなかったのので、男達は自分たちで酒や肴を持ち込んでいた。男の子供も境内に入ってお菓子などを食べながら一晩を明かしたと言う。

干天が続いた場合は、不知火の山上に太鼓を集めて叩き、雨乞いを行う事もあった。集落の天神様に太鼓を持って行き雨乞いを行った事もあった。しかし土用に太鼓を叩くと嵐を呼ぶと言ってその日には決して叩く事はなかった。

管理、保存 伊無田の太鼓は直径120cm、長さ171cm、胴回り380cmで、宇土の雨乞い太鼓の中でも大きな部類に属する。

太鼓の張り替え 物資不足の折りには、太鼓に張ってある牛革を馬具にする為に切り裂いて盗んで行く者がいた。また、若者達が太鼓の皮を新しい物に張り替えたがって無理にうち破る様な事もあった。その都度太鼓の皮の張り替えを行う必要が生じたが、大金がかかる為、簡単に出来るものではなかった（例えば、昭和3年の記録では張り替えにかかった費用は41円となっている）。ある時など集落の寄り合いで太鼓の張り替えがなかなか承認されないのので、セイネン達が勝手に修理に持ち出した事もあったと言う。

太鼓の修理は、村人の手で不知火まで運んで行った。2頭分の牛革を用いるが、太鼓は強く叩かれるので僅かな傷があっても使えない。水に漬けた皮を木に乗せて延ばし、太鼓に張った後、人が皮の上に乗り、中心を足で踏みながら周囲を引っ張り、十分な強さに張る。皮の修復が終わると、伊無田までの帰路である宇土の旧道をパレードする。旧道沿の商店の前で一軒一軒、ウチコミ（打ち込み）を行い、その礼として「お花」（ご祝儀の現金）を貰った。ウチコミの際には、ハヤガケが叩かれる。

（調査者：道免紀子、田中 聡）

栗崎地区

由来 栗崎には雨乞い太鼓を購入した際の「譲渡証書」が残されている（写真35）。それによると栗崎では明治27年6月に300円で、代表を鳶長（集落の評議員4～5名が交替で勤める役職）として購入している。大正7年、昭和9年、昭和47年に関しても記載があり、大正7年には代表を区長として（金額の記載はない）入手している。昭和9年には集落の四つの組（北組、中組、上組、中園組）の青年会代表4名を代表として打越（小字）と共同で入手し、昭和47年11月には清酒一斗と引き替えに譲渡を受けた事になっている。

明治27年に購入した太鼓は中古品であったと言う。当時の栗崎は比較的裕福な農村であり、

反等割（耕作地面積に比例した割当）で多くの寄付金を集める事が出来た。それらの寄付金と区会費を併せて300円の太鼓が購入された。

太鼓祭りは戦前には盛んに行われており、太鼓は専用の太鼓小屋に収蔵されていた。しかし戦争が始まると次第に太鼓奉納は下火となり、太鼓小屋を青年小屋としても利用するに際して、太鼓は邪魔者扱いされる様になり、庭の木に吊された。雨晒し、日晒しにされた為太鼓も傷み、後には集落の天神様に吊された。平成2年の「ふるさと創成資金」により修復され、太鼓収蔵館に保管される事となった。

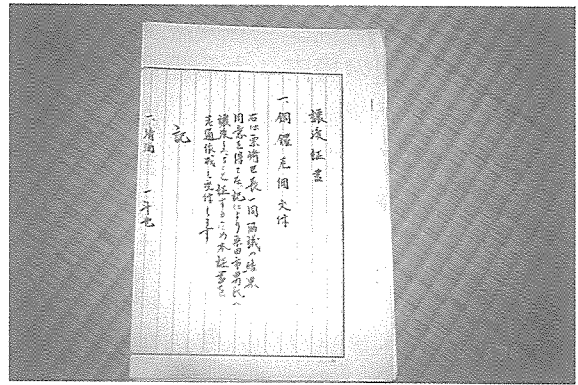


写真35 「譲渡証書」(栗崎地区)

奉納行事 栗崎の太鼓は銅鑼太鼓と呼ばれるもので、叩く面が天地を向いている。太鼓には判りにくいが前後も決められており、ロープを巻き付ける金具によって判別される。太鼓の皮が破れても片面だけであれば裏返して使い続ける事も出来た。

雨乞い太鼓の奉納には、豊饒祈願の他に、悪霊祓いの意味もあるとされ、栗崎では天神様に対して、7月14日に西岡神社から神官を招いて行われる。神官が来られない時には区長が委任を受けて祀る。全体の流れは青年会頭（妻帯者で、栗崎から2名、打越から1名出る）とその補佐3人が仕切った。銅鑼太鼓に注連縄を巻いて、四方に竹を4本立て、注連縄を張る。一日目はゴヤあるいは「疫病祭り」とも称され、悪病を祓う日とされる。これは昔伝染病が流行った事があった為と伝えられている。セイネン達が太鼓を天神様まで運び奉納する。天神様に奉納された太鼓は一晩中叩かれ続ける。男性が交替で叩く。太鼓のバチは先端に色を塗って布を被せて使い、太鼓の皮が痛むのを防いだ。栗崎では鉦は打たれない。横笛が女性達によって奏された。曲目としては「雨乞い踊り」や「ねんねころころ」などがあったが、現在では昔の形では伝わっていないと言う。雨乞い大太鼓フェスティバルでは、記憶を頼りに再現したものを演奏した。太鼓奉納の際の男女の服装は、女性は笠を被り、男性は陣笠に地味な袴を着た。二日目は豊作祈願の「夏祭り」で、笛にあわせて雨傘で踊った。唄はこの際には唄われない。この後天神様から太鼓が降ろされる。

雨乞い祈願の為に太鼓を白山まで運んで叩いた事があった。

雨乞い太鼓は夏に叩くものとされ冬はあまり叩かない。

技術の継承 太鼓の叩き方は特に教えられるものではなく、誰もが耳目で太鼓のリズムを自然と憶えているので、皆太鼓を打つ事が出来た。太鼓を打つ際にはバチを大きく廻すような所作をした。現在これが出来るものはいない。ゆっくりと「ドーン ドンドン、ドーン ドンドン」と叩いた。笛や踊りもかつては名人がいたが現在では地区に伝わっていた叩き方や踊り方は絶えつつある。現在披露している踊りは、他地区から習ったものと言う。

管理、保存 天神様の境内から下った所に「銅鑼小屋」があり、太鼓はそこに保管していた。後に太鼓を使った後は、椿油を湿した布で拭いて保管した。

太鼓の張り替え セイネン達が村の意向に反して太鼓の皮を新しくしようと企てたり、三宮さん詣りをやりたくて皮をわざと切り裂く事がたまにあった。太鼓の張り替えは不知火の堀口太鼓店で行い、大勢の村人でそこまで運んだ。牛一匹の皮を濡らして延ばし、乾かしたものを櫓の胴に張り付けて人が上に乗って足踏みをしながらいき絞る、最後に鉦を打って固定する。太鼓の修復が済むと栗崎までの帰路、宇土の旧道をパレードする。道中、一軒

一軒の商店の前で太鼓を打ち込む。商店では礼として金一封や素麺などを渡した。それから三宮様に詣って栗崎へ帰った。

(調査者：道免紀子、田中 聡)

4)．緑川ブロック

笹原地区

由来 太鼓奉納は、江戸時代に干ばつが多かった為に始められたと伝えられる。

現存する笹原の太鼓は、安政、あるいは文政年間に作られたものと考えられている。子供の頃に、破れた皮から太鼓の内側に入り込んで遊んだ際に「政」の字が刻まれていた記憶のある話者も居る。太鼓の直径は140cmで、現存する大太鼓の中では最大の物である。東北地方で櫓材から胴を作って運んで来たと伝えられる。太鼓の皮は不知火で張る。

奉納行事 太鼓を1、2年に一度張り替える際に、集落の厳島神社に太鼓を奉納した。

太鼓の張り替え 太鼓の張り替えは、村の青年団の有志が自分たちで勝手にその時期を決定し、嫁坂の手前まで太鼓を背負って行った後、村に伝えて事後承諾の形にする事があった。太鼓の張り替えには多額の費用が掛かる為、このような手段がとられた。太鼓の張り替えには35～40才位のトシガシラ（年頭）を筆頭として集落のセイネン皆が付いて行く為、田に水を引く水車を回す人手が不足するような事も起こった。セイネン達は、皮を胴に張る際に、皮の上に乗って飛び跳ねて皮が強く張れるように手伝った。太鼓は張り替える毎に、叩いて潰れた胴の端を削って行く為、徐々に短く成って行く。

太鼓の張り替えが終わって、受け取りに行く事を「太鼓迎え」と称する。15、6才から24、5才までの娘達が50～60名、編笠を手にして、手甲を付け、緋の着物を着て赤い襷を締めて松橋まで迎えに来た。娘達と合流すると、娘達は太鼓の後ろに付いて雨乞い踊りを踊り、笛と鉦も奏される。踊り上手な者を雇う事もあった。その際には「ねんねころころ」を歌う。その歌詞には「ねんねころころ やそべさま やそべが頭は禿頭」と言うような歌詞もあった。太鼓を受け取った後、宇土の旧道を通り、本町通りで商店や家々に「打ち込み」を行い「お花」（ご祝儀。酒の事もある）を貰った。太鼓には厚く大きな油単を掛け、その上に飾りを掛けて曳いて廻った。当時は家の軒が低く、通り道の軒に太鼓がぶつかり瓦を壊す事もあった。その為、大太鼓を「あくしゃ丸」、小太鼓を「あほう丸」と呼ぶ者も居た。最後は、厳島神社（通称、弁天様）の境内に運び込み、そこに村人が集まって夜通し太鼓を叩いた。一週間程も続けられ、「お花」はその間の飲食費に用いられた。明治41年当時の太鼓張会会計簿も保存されている。

雨乞いは田植え後、干天が続く際に行われたが、用水路が造られた後には娯楽として行われる様になった。

(調査者：松永里美、内村光弘)

新開地区

由来 太鼓の木は奥山からウマノセのシマノウチノオクラ（現在の上新開付近）まで運んで来て造ったと伝えられる。最初に集落で造った太鼓は上手く鳴らなかったと言う。昭和24、

5年頃まで集落の堂の境内に藁葺きの小屋を設けて太鼓を保管していたが、そのころには奉納されなくなっていた太鼓も薪として入札に掛けようとする意見も出た。しかし、先祖代々受け継い出来た太鼓を処分する事への反対意見も強く、お堂の中に保管された。

奉納行事 太鼓奉納に関しては、二通りの話が聞かれた。一つは、田植えの後サナブリ時期に集落のお堂に太鼓奉納を行ったとする話で、サナブリは三日間で期日を区長が決定し、中の日に太鼓を叩いたと言う。新開には雨乞い踊りは伝えられておらず、太鼓と笛のみだったとされる。太鼓は普段は宮田静雄氏宅に保管されていたが、当日は堂の前まで曳き出され、各家庭から料理を持ち寄り、夜通し叩かれたとされる。太鼓が階段を登る時には、タイコンボウと呼ばれる5m程の棒で支えたと言う。今一つは、同じくサナブリ時期に西岡神社へ太鼓を奉納したとする話で、社殿を廻ってお祓いを受け、帰路には本町通りを通ってお花を貰ったとする。後者は、太鼓の張り替えの際の儀礼とも思われる。

太鼓を叩くのは重労働故、若い体格の良い男性の役目で、交代で叩いたとされる。雨乞い踊りは、女性が笠に飾りの花を付けて踊ったり、オッコイと呼ばれる男性が女装して行った。横笛は女性が、鉦は男性が、派手な衣装を着て演奏した。奉納行事は戦争により行われなくなった。

太鼓を9月過ぎに叩くと大風が吹くと言う。

技術の継承 子供の頃から地区の先輩達に叩き方を習っていた。大正生まれの世代が先輩から叩き方を習った最後の世代である。

太鼓の張り替え 太鼓の張り替えは、1週間程かかる。不知火の堀口商店に運び、セイネン達が交代の泊まり込みで手伝った。太鼓の張り替えには金が掛かり、なかなか認めて貰えぬ為、セイネン達だけで語らって嫁坂まで太鼓を勝手に引き出して、それから何人かが村に戻って区長に報告した。

(調査者：内村光弘、松永里美)

城塚地区

由来 雨乞い太鼓は五穀豊穡を願って雨を降らす為に始まった。太鼓の周囲の前後合わせて66個の飾りを「木星」と言うが、これは戦国時代の日本が66の国に分かれていた事に由来すると言う。城塚の太鼓は音が高い事から「姫丸」と呼ばれ、鉦と共に西村和泉守の作と伝える。

奉納行事 田植え上がりのサナブリに太鼓奉納を行った。サナブリは田植えが終わって後、盆までの間とされ、現在の暦ではだいたい7月15日から8月15日までの間となる。太鼓奉納は、この期間に区長が日にちを決定した。集落の毘沙門天へ紅白の飾り布を付けた太鼓を奉納する。演目には「道太鼓」と「ねんねころころ」の二つがあり、夜通し交代しながら叩かれ、「堂ごもり」とも称された。太鼓と鉦は若い男性が、笛は若い女性が担当した。踊り手は菅笠に浴衣姿で、女性は手甲、脚絆をつけていた。女性は、握り飯、煮染め、胡瓜のスイ(酢漬)などを作っておいて、祭りに出した。

ねんねころころ歌詞

ねんねころころ やそべ(子供)殿

やそべがととちやん（父ちゃん）たちどけいかいた（何処へ行った）
薩摩、大隅金（かね）堀や
金は掘れんで、だだ（馬）買うて
だだはどけどまつないでいた（何処に繋いでいた）
三本松の木の下に
なにば喰わせておいたかい
去年の家がら粟がらさんばかりかせといた
薩摩土産は何々か
一に香箱、二に鏡、三で薩摩の糸買うて
（以下は不明）

この他、火事や津波など緊急時にも太鼓を叩いた。

技術の継承 学校を卒業後、15才位から青年団に入っていた。水曜日と日曜日が休み日で、セイネンは太鼓小屋である公民館の前で太鼓を叩いていた。子供の頃から、セイネン達が太鼓を叩くのを見たり、その場で叩かせてもらったりしていたので自然と叩き方などは覚えた。休日に太鼓を叩くのは当時の娯楽だった。

管理、保存 現在の公民館のある場所が太鼓小屋で、消防ポンプなどと一緒に保管していた。

太鼓の張り替え 太鼓の皮が破れると、セイネン達が台車に太鼓を乗せて、若い順に並んで担ぎ、松橋の修理店まで持っていった。皮の張り替えには1週間から10日はかかるが、セイネンが交代で泊まり込み仕事を手伝っていた。皮を張り終わると、早朝8時位には店を出て、途中、宇土の本町通りを廻って、親類や姻戚、知り合いの御店などで打ち込みを行い「お花」を集めた。これには警察の許可も必要だった。夕方には村へ帰り着くが、その際には区長宅に立ち寄って、「お花」を貰った。それからお宮に運び、境内を一巡りした後、一晩中太鼓を打ち明かした。戦後では昭和28年と昭和49年の2回、張り替えを行っている。昭和28年の張り替えには約20万円掛かっている。太鼓の張り替えは一種の娯楽であり、バチに水を付けて同じところばかりを叩き皮をわざと破いたりもした。

（調査者：内村光弘、松永里美）

恵塚（恵里）地区

由来 由来は不明。昭和10年代まで雨乞い太鼓の奉納を行っていた。明治の初年、網田堂園地区の大太鼓と恵塚の小太鼓を、恵塚がお金を払って交換したと伝えられる。胴は櫓で、66個の木星の数は日本の国の数と言われる。

奉納行事 田植えあがりの7月10日頃の二日間（区長が期日を決定する）、太鼓を集落の尾上神社（西岡神社末社）に奉納した。サナブリは三日間でその内二日、太鼓を叩いた。毎年奉納していた訳ではない。集落内を廻った後、神社に奉納する。雨乞いは田植えあがりの慰労会の様なもので、神社へのお供えは各家庭から持ち寄り、豊作と家内安全を祈願した。太鼓を叩くのは、15歳以上の独身者のみで組織される青年クラブの中の上手な者、2、3名だった。太鼓には笛と鉦、踊りが付いた。踊りは、編笠に赤い襷締めと言う扮装で踊られた。唄は「ねんねころころ」であった。「ねんねころころ」の歌詞は「ねんねころころ、やそべ

殿 南郷八代金（かね）掘りに 金が掘れんとて状（手紙）が来た…」と言うもので、鉦山人夫の唄と言われていた。

太鼓小屋には消防ポンプも置いてあり、奉納行事以外では、火事など非常時の村人への連絡の為に太鼓を叩く事があった。

土用を過ぎて太鼓を叩くと台風が来ると言われており、叩かなかった。

大正の初め頃、酷い干ばつがあり、西岡神社に緑川、轟地区の太鼓を集めて皆で雨乞いを行った。太鼓を叩くとその振動で雨が降ると言う。

技術の継承 尋常高等小学校を卒業すると結婚するまで青年団に加入する。集落内に青年小屋があって、そこに皆集まって太鼓の練習をした。太鼓も鉦も先輩のやり方を見て、自然と覚えた。

管理、保存 太鼓は太鼓小屋に保管され、鉦は区長が保管した。

太鼓の張り替え 太鼓の張り替えが必要になると、セイネン達が、嫁坂まで太鼓を馬車でこっそり運び、その後に村の役員と張り替えについて交渉した。張り替えは不知火で行い、その間、一週間、若者が張り替えを手伝った。張り替えが終わると本町通りを廻って「お花」（ご祝儀）を集める。太鼓の張り替えは10年に一度あるかないかで、最後に村で太鼓を張り替えたのは昭和7年頃である。

（調査者：内村光弘、松永里美）

5) 網津ブロック

網引地区

由来 雨乞い太鼓が造られたのは天保年間の事とされる。元は網引の4箇所の小字それぞれにあったが、現存しているのはそのうちの2基で、面は直径90cmと96cmである。

皮は牛一頭分である為、一基張りかえるのに80万円かかる。張り替えの職人は松橋と熊本市内に一人ずつおられる。村に財力がある所は大きな太鼓を作った。

奉納行事 戦前には田植え後に各部落がそれぞれの氏神に太鼓を運び、一晩中叩き奉納を行っていた。この雨乞い祭りの事をサナブと言う。太鼓を叩くのは雨乞いの為であり、虫送りの意味合いは持っていなかった。また、太鼓そのものが村の象徴であった。奉納行事の中心になったのは青年団の人たちであり、特に楽しみのない時代の娯楽であった。踊り手、太鼓の叩き手、鉦の叩き手などの役割分担が決まっており、他の人はその前後に付いて行った。太鼓を曳くのは男性だけではなく女性も曳いていた。村を回るとき、二人が太鼓を打ち一人が踊った。踊り手は縄み笠をかぶっていた。人手が足りなかった為、忌みが掛かっていると言う理由で、奉納に参加出来ないとする決まりはなかった。奉納行事は支那事変を境に行われなくなり、太鼓の胴は筒として保管されたが丁寧に扱われなかったものは壊れた。太鼓の鉦も戦時中には弾として供出された。

組織 現在保存会の会員は集落の全員であり、子供会も活動の一環としてフェスティバルに参加している。練習は6月から始められ、子供は週に1回（夏休みは毎日）、大人は週に3回行う。踊りは婦人会が担当し、子どもは太鼓と笛を担当する。笛は戦前と違い縦笛を使うが、メロデーは横笛で吹いていたものと同じである。太鼓の調子は昔のものも演奏するが、今流行の創作太鼓も行う。昔の太鼓の打ち方は古老の方に指導者となって頂き、練習す

る。昔の踊り方を記憶している方はおられないが、笛を吹かれる方は3人程おられる。

(調査者：山口宏樹)

馬門地区

由来 雨乞い太鼓が何時造られたかと言う記録は特になく、年中行事に用いる道具の一つとして太鼓は保存されていた。他の製造年代がわかっている太鼓と比較すると江戸時代中期の細川氏が治めていた時代に作られたものと集落では考えられている。地区の小字の中に「はまんだ」(浜田)と言う地名があるが、400年程前まで、馬門には海が迫っており、その当時太鼓はなかったと言われている。加藤清正が堤防を築き農地を拡大し、排水をする為の水路を作ったが、それから100年以上経って太鼓が造られたのではないのかと言う。馬門の太鼓は樺の大木を削り抜いて牛皮を張ったものであり、面径130cm程であるが、胴の中心はもっと太くなっている。

奉納行事 夏になると青年男女が太鼓を打ち鉦を鳴らし、娯楽として楽しんでいた。

田植後の7月12日の夜に「お通夜むし」と言う、大歳神社の周囲で一晩歌って楽しむ行事が行われていた。それは隣の集落と競演のような形で行っていた。太鼓と同時に相撲も盛んに行われており、近隣からもよく見に来ていた。祭礼に参加出来ない者は特になかったが、喪中の人などは遠慮して来なかった。雨乞い太鼓の唄に題名は特になく、「ねんねころころやごべさま」と言う調子を取る唄が太鼓と鉦を合わせる為の音頭として謡われた。踊り手は浴衣、赤い腰巻、縮み笠と言ういでたちで棒踊りをした。

奉納が行われなくなったのは戦時中で、太鼓の皮が不足し破れても張り替えが出来なかった為とされる。また、戦後は太鼓に対する関心が薄れ、雨乞いに対する意識そのものも薄れてきた。戦前は水が足りずに集落で農業用水を奪い合う事もあったが、現在は緑川から水を引いている為、水に不自由しなくなり、また、農家の若い人が減ってきたので太鼓に対する興味も薄れてきたと言う背景とがある。太鼓には雨乞いだけでなく防虫の願いを掛けると言う意味もあり、豊作に対する祈りの為に行っていたと言う色合いが濃い。

組織 雨乞い太鼓の為の特別な組織と言うものではなく、青年団に任されていた。祭礼における役割分担は、男性が太鼓と鉦の叩き手であり、女性は雨乞い踊りの踊り手であった。また、笛は男女の区別なく吹く事の出来る人が吹いていた。雨乞い踊りの中心になるのは錠門(女子青年団)の中の、学校を卒業し嫁入り前の若い女性であった。

技術の継承 太鼓と鉦については特に何歳から練習をすると言うのではなく、年長者が打っているのを見聞きして、見よう見まねで打つ事で覚えていった。太鼓が収納してある小屋への出入りは自由で、何時もバチが置いてあった為、いつも子供が叩いていた。子供の遊びの一つであり、指導者も特になかった。笛は練習していないと吹けないので、他の部落の人を借りて吹いてもらったりしていた。馬門では網引地区の高村さん(女性、故人)に来てもらっていた。踊りの練習は晩に大歳神社で行っていた。

管理、保存 太鼓収蔵館が出来る前は大歳神社横の小屋が収蔵庫であった(写真36)。

太鼓の張り替え 戦前は一年に1回太鼓の皮の張り替えを行っていた。毎年、費用が高つくので張り替えは止めようと言う意見が出るのだが、青年団の者たちがわざと皮を破り、夜に無断で持ち出し松橋まで運んで張り直していた。松橋からの帰りは30~50人で長い網を曳いて運び、張り替えの費用集めの為に「御花」(ご祝儀)を貰って回った。戦後張り直し

たのは2回である。1回目は昭和30年前後で、当時で80万掛かった。2度目は太鼓収蔵館に移す際の事である。太鼓収蔵館に持っていく事に特に抵抗がなかった理由の一つとして、皮を張り替える費用が大きかった事があげられる。

（調査者：米正玄太、村上 彩、山口宏樹）

西中村地区

由来 太鼓の製造年は太鼓に書いてあるが、はっきりとは判読が出来ない。江戸時代に始まったものと思われると言う。

奉納行事 土用の三日目にカワマツリと称される田の神様に水を与えてもらう祭りがあり、太鼓を棒にくくりつけて、「よいしょよいしょ」と言う掛け声をかけながら住吉神社に担ぎ上げた。その後は一晩中太鼓を叩いて踊ったり、食べたり飲んだりして楽しんだ。太鼓を叩く事に無病息災の祈りが込められており、太鼓を叩く事が奉納を意味した。椿原のように太鼓の上に乗って横に揺らすと言う事は危険なので行わなかった。朝になるとまた階段を下って降りた。祭りの時には太鼓に紅白の幕を張り、男性は法被を着て鉢巻を締め女性は菅笠、赤い腰巻に襷、草履と言う出で立ちで参加し、棒を持って踊った。喪中の人には参加出来なかった。

太鼓の皮の張り替えの際に店の前などで打ち込みをする時と、太鼓奉納の時とでは太鼓の打ち方を変えていた。打ち込み以外の時は、「ねんねころころやごべさまやごべがあたまはかさあたま」と言う歌詞を唄っていた。「やごべ」とは、「むしけ」即ち、弟や妹が出来て親などの関心がそちらに向いてしまった為に癪癪を起こした子どもの事で、「かさあたま」とはおできが出来た頭の事を言う。

田植えが終わるとサナブと称して、餅を搗いて田植えの手伝いをしてくれた人たちに配る習慣があった。田植えあがりには三日越しのヨケ（休み）があり、旗をあげて休んだ。また、農閑期には三日おきに昼からヨケがあった。その際に太鼓を叩く者もいた。農閑期の娯楽としても太鼓を叩いていた。また、子どもたちは夏休みの遊びの一つとして太鼓を叩いていた。太平洋戦争が始まると祭りはなくなり、戦後も人手が足りなかったので行われなくなった。

組織 祭礼の為の特別な組織と言うものではなく、青年団が主催し、区長が世話役を勤めた。世話役はお金の世話などもしていた。太鼓を叩くのは男性のみであったが、踊りは男女とも踊った。笛を吹く事が出来るのは、各地区に一人か二人程しかいなかった。雨乞いを行う日取りは、1月の第二日曜の初寄り合いで決めた。他にも一年の行事や世話役などの役割分担を決める。世話役の任期は一年だった。

技術の継承 太鼓には練習といったものは特になく、先輩が打っているのを見よう見まねで打っていた。踊りの練習は、張り替えた太鼓を迎えに行く1週間前から、毎日夕方から夜にかけて行われた。指導者は踊りの振り付けをした人だった。太鼓や踊りの練習は、区長の家の前で行われた。

管理、保存 太鼓収蔵館が出来る前は村の中の家を持ちまわりで預けて保管していた。保管している家ではクヤク（共同作業：井戸さらい等）を免れた。

太鼓の張り替え 不知火で皮を張り替えた後に、買い物でお得意になっている商家の所に

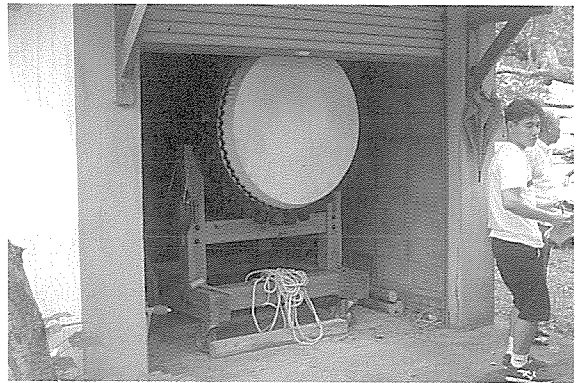


写真36 太鼓小屋（馬門地区）

行って太鼓を打ち込み、踊って「御花」を貰った。何処から幾ら貰ったと言う紙を太鼓に貼った。西中村で最後に張り替えたのは40年前である。皮の張り替えは不知火の職人に頼んだ。

(調査者：山口宏樹、村上 彩)

笠岩地区

由来 太鼓の製作年は不明であるが、弁天様の石灯籠に天保14（1843）年とあるので弁天様が祀られ、太鼓が造られたのはその前だと考えられている。宇土は灌漑が充分ではない為雨乞い太鼓が発展したとも言われている。弁天様は集落の溜池の側に位置する巨大な岩であり、笠岩地区のみの氏神とされ、七福神の中では唯一の女神とされる。また、この笠岩の弁天様は住吉神社から分霊してきたとする話者も居る。

奉納行事 太鼓を叩くのは水が一番欲しい時である。20人程で土用三日目の水祭りの日に住吉神社に太鼓を奉納した（水祭りと住吉神社の祭りは別のものである）。住吉神社は網津全体の氏神であり、延久年間（1069年～1074年）の間に大阪摂津の住吉神社から分霊してきた。海上安全を守る神とされる。境内が位置する場所は、元々「宇土小島」と称され、その名の通りの小島であった。陸続きになったのは寛文12（1673）年に堤防が出来て以降である。川尻が輪送の拠点だったので緑川を船が通り、その為に灯台の役目をする灯籠が立っていた。笠岩、中村、新村、堤の各地区が競争で住吉神社に上げるのがどこが一番早いか競った。早く上げられた地区から順に拝殿の両脇や余興のステージに太鼓を置いた。拝殿に近い方に置けるよう競い合った。また、太鼓を担いで境内をまず右廻りしてその後左廻りをした。太鼓を上げた後は一晩中寝ないで太鼓を叩いていた（これをウチヤモヨイとかウチヤモシと言う。太鼓を下ろす際には、先に境内に上げた順に降ろして行った。その後、集落の弁天様に太鼓を運び奉納した。昔は伝染病が多かった（昭和6年ごろに赤痢が流行った）ので集落の水を清くし水を祭る為に弁天様への奉納を行っていたと言う。また、当日は各家庭の井戸を全部さらえていた。水祭りでは煮しめや芋などの酒の肴を各々家庭から持ち寄って弁天様に上げ、そこで酒宴を開いた。祭りは区長が仕切った。奉納の際には、ウケマイ（当番、持ち回り）の地区を定め、植木から役者を頼んで芝居をしたりしていた。芝居は三日程行われていた。喪中の人、その一年間太鼓を担いだり神社に行ったりする事は出来なかった。ただし、普段太鼓を叩く事は出来た。また、出産はめでたい事なので参加出来た。

奉納の際には、太鼓には8m以上もある担い棒にロープで縛り、その棒を担いだ。また、梅の紋がついた紺の油単を太鼓に掛けていた。バチは桐を乾かして穴をあけ、そこに紐を通したもので、これは皮を傷つかなかった。笛も手作りであり、破竹の雌竹の一節を使って横笛を作っていた。穴と穴の間は3～5cm程であり、五つ穴だった。古いものの方が音は良い為一つ作ったら何年も使っていた。生竹では響かず、乾いた竹を用いて作っていた。また、この笛の作り方は先輩から教えて貰った。太鼓、笛、踊りは総て男性が行っていて女性は食事の用意をしたりする裏方だった。踊り手は3人位で編み笠を被り派手な衣装を着てたすきをかけ、ふさのついた棒を持っていた。また、笛を吹ける人は限られていた。

踊りの唄には「ねんねころころ」の他にも、「高い山から谷底見ればの いへぐりやなすびの花盛りが あっちのうさどんどんこっちのうさどんどん」と言う唄があった。太鼓を引いて歩く時と打ち込みの際には打ち方が違った。引いて歩く時はただ打つだけであり、打ち込みの時は「ねんねころころ」であった。店によって打ち方を替える事はなかった。

水不足の際には祭りとは関係なく雨乞いとして太鼓を叩いた。これ以外の雨乞いの方法はなかった。また、昭和9年には大干魃のせいで水喧嘩が起こり警察沙汰にまでなった。

戦中になると祭りどころではなく、太鼓奉納は戦後も途絶えてしまった。

組織 太鼓を叩く中心は、集落の若者で、尋常高等小学校を卒業した頃（14、15歳頃）に青年団に男子は全員加入した。青年団には加入式や挨拶などは特になかったが、団長や副団長がいて話し合いで決まっていた。青年団では1～3歳位年の開きのある人が4～6人位で寝泊りをして、色々な話をしたりした（夜遊び）。それは社交の場でもあった。昭和6年の支那事変の後、網津青年学校（今の網津小学校）で軍事教練が行われており、強制ではなかったが青年団の人たちは自主的に行っていた。

技術の継承 太鼓を担ぐのは尋常高等小学校を卒業した位（14～15歳）からであった。それ位になると一人前であり、青年団に入った。太鼓の打ち方の練習と言うものは特になく、見よう見真似で打っていた。鉦は青年団の中でも年若の人が担いでいた。笛は特技だったので吹ける人が吹いていた。

管理、保存 轟の太鼓収蔵館が出来る前は個人の家や精米所、消防署に保管していた。個人の家で預かって貰う場合は、家は大きいが家族は少ないと言う家に預かってもらった。母屋の大きな部屋などに保管していた。精米所では天井に吊っていた。消防署では格納庫に入っていた。

太鼓の張り替え 各地区で太鼓を競って叩き、音の響きが悪いと皮を張り直そうと言う事になる。また、祭りの後は自然と叩かなくなりそのうち皮が湿って緩み、響かなくなる。そこで集落のセイネン達は年に1回は太鼓を張り替えたがった。しかし、事前に集落の者に相談すると年長の人に反対されるので、夜中に7～8人の本笠岩の若者がこっそりと駅に持って行っていた。そこからは貨車に乗せて不知火の高良に持って行き張り替えてもらった。張り替えと言うのは若い人の楽しみであり、田横えが終わったらそろそろ張り替えようと言う事になった。張り替えが終わると村人が総出で太鼓を迎えに行った。鉄の車輪がついた荷車に乗せて子どもたちが太鼓の網を曳き、若者が叩いた。張り替えからの帰り道に宇土木町で打ち込みを行い「御花」（ご祝儀）を貰って来ていた。張り替え代は、その「御花」と村人から集めたお金とで賄っていた。皮が緩んで音が響かなくなる為に張りかえるのだが、費用が掛かるので一年に片面だけしか張り替えなかった事も多い。米一俵が9円の時に、張り替えは10円程掛かった。最後に張り替えたのは昭和10年頃だった。

（調査者：村上 彩、山口宏樹）

猪白地区

由来 豊臣秀吉の時代、宇土の殿様が食事をしようとした際に、料理の横に百姓が農作業をしている絵が置いてあった。それを見た殿様は、百姓は田植えばかりで娯楽も少なく辛いだろうと言われて、太鼓で楽しむ事を許された。かつては太鼓は一軒一軒の家を毎年回して保管していたが、後に稲荷神社の社殿の中に保管される事になった。

奉納行事 太鼓奉納は、稲荷神社と妙見神社へ行っていた。奉納は2名の世話役と青年団が中心となって行われる。世話役は推薦で決められ任期は不定。太鼓を担ぐ際には、太鼓の四方に棒を立て、その先端にシデを貼る。太鼓は20才を越えた男性が叩き、鉦は前後二人で担いで歩く。笛は女性の担当であった。家に不幸があった者が太鼓を叩く事は禁忌とされた。

唄には「高山」、「ねんねこ」、「しんちぶし」などがあった。

(調査者：米正玄太)

6). 網田ブロック

堂園地区

由来 豊臣秀吉の時代の朝鮮出兵の際に、朝鮮の大太鼓を日本で真似て作られたのが始まりと伝えられる。太鼓に付いている「木星」の数は、当時の秀吉の家来大名の数に因んで46個と成っている。堂園が属する網田地区には大体集落に1基ずつ、全体で14基の太鼓があった。その大きさは集落により様々であった。中には自重が2トン程の太鼓もあり、他の集落から加勢に来ないと担げぬ程であったと言う。

奉納行事 雨乞いは夏の干魃の時に区長会での話し合いで行うかどうかが決められていた。雨乞いは他の部落と共同で行われており、網田神社に網田中の太鼓が集まって一勢に叩かれた。雨乞いには少なくとも1軒の家から1名は参加する事が求められた。雨乞いをする時期は夏で、稲作に水が必要な時であった。最も盛んに行われたのは、江戸の末期から明治の初まりの頃だったと言う。戦時中には徴兵などで若者が少なく、生活も苦しくなり、また灌漑設備が整った為、雨乞いは行われなくなった。太鼓は生活の苦しさから売却されたり、放っておいたまま壊れてしまった為、薪に使われたりして、現在の数にまで減ってしまっている。

雨乞い太鼓は村中の男達約20名程で丸太を太鼓の取っ手に通してロープで固定して担がれていた。太鼓を綱で曳く者、担ぐ者など太鼓に関わる者は法被を着て、鉢巻きをしめていた。踊り手は花笠をかぶり、面をつけて仮装し、太鼓のバチの両端に飾りを付けたものを持って踊った。この雨乞いには誰でも参加出来、最低でも一家族に一人は参加するようになっていた。太鼓は、行列をつくって網田神社へ運ばれる。その行列の通る道順は決まっておらず、「御花」(ご祝儀)をくれた人の家の前で太鼓を叩き、道の途中にお堂があると、そのお堂の前でも叩いた。神社の鳥居の大きさは、太鼓がやっと通る位であった為、太鼓を潜らせるのが難しかったと言う。神社に着くと他の部落と一緒に一斉に太鼓を叩いた。太鼓の振動で雲を呼び、そして雨が降ると考えられていた。逆に余計な時には叩いてはいけないとされ、冬に叩くと風が吹くなどと言われた。境内では、太鼓を叩く者の内でも上手な者が、太鼓を叩きながら踊るマイバを演じ皆を沸かせた。太鼓の他には鉦、笛、三味線が奏され、女性は花笠を被って踊った。神社では太鼓を一晩中叩き続け、宴会を開き、飲み食いをして一晩境内に籠もった。この時は誰でも太鼓を叩く事が出来た。女性は、宴会にはあまり参加せず、飲み食いの準備や片付けなどを行った。宴会が終わり、一晩たって帰る時にも太鼓は叩かれていた。神社での雨乞いの後、雨が降ったら神社にお礼参りをしており、内容は雨乞いの時と同じような内容であった。

このような奉納行事は50年程前までは行われていたが、用水路や揚水ポンプの発達で、あまり水に困らなくなった事や、太鼓の破損、後継者不足などから次第に行われなくなった。

薬師登り その他の雨乞いに関する行事としては「薬師登り」、「豊作祭り」、「八朔祭り」がある。8月20日に行われていた薬師登りは鉦だけ持って叩きながら、山の上の薬師堂まで登り、お神酒あげをして、一晩堂に籠もると言う雨乞いの方法で、山を降りる時にも鉦を叩いていた。薬師登りは現在も行われており、午後の1時から薬師堂でお神酒あげをして、宴

会を催している。薬師登りは、昔から堂園・上床・中登・下戸田の4集落で集まって行っており、現在もこれらの集落で集まる。薬師堂では集落ごとに別れて座るが、互いの集落の座へ遊び遠びに行ったりして、集落の交流の場となっている。今は自動車で山へ登るようになってしまったので鉦は叩かれていない。「薬師様は雨を持っている」と伝えられ、薬師登りの時には雨が必ずと言って良い程降り、登る前は晴れていても、登って行くとたんだん雨が降り出して来たと言う。

八朔祭り 八朔祭りが行われる9月1日前後は、ちょうど稲の成長期の頃であり、雨が一番欲しい頃であった。この祭礼では、余所からしっかりと相撲取りを呼んで来て、相撲を取らせていた。相撲取りの世話は、各集落が交代で行っていた。八朔で雨を祈願して降らせて、豊作祭りの「にわか」で雨を降らせてくれた事に対して感謝すると言う。

豊作祭りと「にわか」 豊作祭りは、旧8月9日に網田神社で行われ元々は太鼓なども出て、雨乞いの意味があったと言われている。豊作祭りに先だっては旧8月1日の八朔祭で網田神社に関取が招かれ、相撲が興行されていた。豊作祭りの当日、農家ではお神酒を持って自分の田に撒いて廻っていた。婦人会の女性達が浴衣を着て踊りを踊り、鉦を叩いて網田神社へと向かって行く。通り道には見物人が多くいた為、「道分け」をしなければならなかった。道分けとは男性4人が樽に五穀を入れ竹の担ぎ棒を結わえた「樽御輿」を担ぎ、ふらつきながら進んで行くと言うもので、ふらついている為に見物人が自然と道を空ける事から「道分け」と呼ばれているらしい。こうして出来た道を踊りながら通って行き、神社へ入る。神社では集落ごとに舞台上で「にわか」が演じられる。「にわか」で歌われる唄は、雨乞いのものと同じだが、あくまで豊作祭りとして行われていた。各集落の「にわか」演じられる内容は様々だが、最後の場面はどれも皆、決まっていて、道分けの樽の中の五穀を紙に貼っておいたものを取り出して、「何かと思えば五穀ではないか。これさえあれば豊年満作」と言うオチがついて終わる事になっている。この「にわか」を行う集落の順番は、境内に着いた順番で決めていたので、各集落の行列は、早く神社へ行こうと先を争っていたと言う。この「にわか」は、雨を降らせてくれるなら、網田が網田である限りはずっとやり続けますと言う願掛けをした事から始まっていると言う。現在、行わなくなってしまったのは、網田が宇土市になった為、網田が網田でなくなってしまったからだと言う話者も居る。

その他には、集落で天然痘が流行した時に、薬師如来の前で太鼓を叩いて病魔を鎮めた事があったと言う。

組織 雨乞い太鼓に関して特別な組織は存在せず、村の役員達が行事を取り仕切っていた。役員の構成は区長が1名、その他に世話役が4名いた。区長の決めた事を村中に伝えたり、その為の補助をしたりするのが世話役の仕事である。世話役は区長が適当な人を選んで決めている。

技術の継承 太鼓の叩き方には基本的に2種類あり、太鼓が神社に着くまでの「道楽」と言う叩き方と、神社に着いてからの「早楽」と言う叩き方があった。そして、これらをアレンジした叩き方で、踊りながら叩くマイバと言う叩きもあったと言う。太鼓を打つリズムは、「トントンスットンスットントン」と言うリズムで、笛も似たようなリズムで吹かれていた。叩くのは結構大変で、打ち切るのはなかなか難しく、普通は10分程度も叩けば交代すると言う。

太鼓を正しく叩ける人は少なく、間違った叩き方をする人も居た。現在公民館がある場所には、昔は太鼓小屋があって、そこで練習が行われていた。子供の頃から親の打つ姿を見て

覚えて行き、実際に習うようになるのは小学4年生位からだと言う。覚えるのは大変で、しっかり叩けるようになるのは、早くても1～2ヶ月はかかる。踊りについては特に決まった踊り方がなかった為、好きなように踊っていたと言う。踊り手は中年層と老年層の女性で構成されており、若い女性は踊りには加わらなかった。

管理・保存 現在公民館の建っている場所に、昔は太鼓小屋があって、そこに保管されていた。太鼓の皮は牛の革で出来ており。皮が破れてしまうと、張替をするには100万円はかかるだろうと言われている。現在、太鼓は網田中学校に寄付され、網田中学校では運動会の時などに利用している。

(調査者：畝原久美子、金子俊二)

引の花地区

由来 網田神社の祝詞によると、雨乞い太鼓の始まりは文化11(1814)年とされる。引の花の太鼓の内部には記銘があり、製作されたのは天保11(1840)年で、上益城郡御船町で作られたものとされている。現在の太鼓の寸法は面径95cm、胴回り343cm、長さ147cmである。以前はもっと胴が膨らんでおり、今よりも大きかったと言う。腐った所を削っていった為に小さくなったとされる。また、かつては太鼓の上に神社の屋根の形をした覆いが設けられており、木星も大きな物が少ない数とめられていた。太鼓に掛ける油単は、古い物には「びきの花」と書かれていた。これは景行天皇がこの地域に来られた時に、ビキ(蛙)達が鼻を揃えて並んでいた事に由来すると言う。

奉納行事 雨乞い太鼓の奉納は、干魃時に行われており、決まった時期や回数はなかったが、稲が育つ為に水が欠かせない夏に行われる事が多かった。雨乞いとしての太鼓奉納は他の網田内の部落と共同で行われていた為、太鼓奉納を行うかどうかは他の部落の区長達との区長会で決められていた。太鼓奉納は網田神社に集まって行われた。太鼓を力強く叩く事で空気を震動させ、その震動で雲を呼び雨が降ると言われているが、神にも降雨を祈願する為に神社の神官の協力も必要とされた。神の力と太鼓の力の両者が揃って始めて雨を降らせる事が出来ると言う。太鼓には、お宮の形をした屋根が付けられ、行列を伴い、車に乗せて神社まで運ばれた。その時の行列の構成は、先頭の者が笹竹を持ち、その後ろに太鼓を綱で引く人が従い、鉦、笛、踊り手と言う順であった。服装は特に決まっておらず、皆、思い思いの格好をしていた。この行列の通る道順は決まっておらず、神社に着くまで様々な所を通り、途中で依頼があれば、依頼者の家の前で太鼓を叩いて打ち込みを行い、「お花」(ご祝儀)を貰ったりした。打ち込みは大変縁起が良いとされ、非常に喜ばれた。道の途中でお堂や神社などがあると、その前でも太鼓を叩いていた。網田神社に着くと、太鼓は鳥居の下を通って神社に入る。それから、社殿の周囲を、鉦だけを叩きながら回る。それから太鼓を叩き、笹や団扇を持ち、バッチャ笠を被った女性達が「エイサ、エイサ」と掛け声を掛けて手踊りをしていた。笹には、「お花」の金額を記した紙を沢山吊り下げていた。太鼓は交代で休まず叩き続けられ、宮司と区長は寝ずに祈り続けた。

網田神社で雨乞いを2、3回行っても効果のないときには、戸口の天神社に全員で詣で雨乞いを行う。それでも雨が降らないときは、「堂籠もり」が行われる。引の花は集落の半ばで「上」と「下」とに分かれており、上は阿弥陀堂、下は六地藏堂に区長が一晩中籠もった。現在では、年中行事として2月7日と、田植えの後の6月末に行われ、夜を明かして酒を飲

む。

鉦は様々な用途で使用されており、その時の状況に応じて打ち分けられていた。鉦の打ち方は集落によっても違い、音を聞けばどの集落かが分かったと言う。鉦は虫追いでも用いられる。期日は不定だが夏に区長が三日間堂に籠もり、他の者達は鉦を叩き、松明を持って田を廻る。翌日には虫が沢山死んでおり、川はその死骸で洗い物が出来ない程だった。

雨乞いを行っていたのは昭和の前半までで、戦争の為、自然と消滅した。生活するのが精一杯で余裕がなかった上に、用水路の発達で水利も良くなり、雨乞いをする必要もなくなったと言う。

豊年祭の樽御輿とにわか 1998年度の雨乞い大太鼓フェスティバルでは、集落から会場への道行きに、樽御輿が同行した。樽御輿は空の酒樽に稲穂、黍、里芋などを飾り、竹の担ぎ棒を結わえた御輿である（五穀を飾るとも言われる）。かつては旧8月9日に網田神社で行われた「豊作祭り」の際に樽御輿が作られた。この頃は、一年の内でも雨が少ない時期で、旧8月1日の八朔祭では太鼓を叩いて雨乞いをしていた。

8月9日の当日、農家では自分の田に出て御神酒を撒く。網田神社での豊作祭りは他集落と共同で行われ、先に神社に着いた部落は、後から来る部落を鉦を持って迎えに行った。神社へ向かう各部落の先頭は「道分け」を行った。「道分け」では、樽神輿をぶらぶらと担ぎ歩く為、自然と見物人が避けてくれるようになり、後ろの行列が通りやすくする役目も負っていた。子供は踊りながらお宮へ行き、鉦が叩かれた。豊作祭りでは集落毎に「にわか」も演じられ、演じる順は、神社に早く着いた順であった。「にわか」の内容は様々だが、「網田にわかには止めてはならぬ」と言う歌詞があり、どれも最後は必ず樽の五穀を取り出し、「これさえあれば豊年満作」、「五穀揃って円満豊作」と言う締めくくりになっていた。総てが終わると集落に帰ってシマイワイを行った。

組織 雨乞い太鼓の為の特別な組織はなく、通常の村の役員達が雨乞いも執り行った。具体的には全体を取り仕切る区長、区長の様々な手助けをする世話役、小学校の高学年から、上は結婚した人も含む青年達が構成された青年団が雨乞いに大きく関わった。太鼓、鉦、笛などの役割分担は、誰が何をすると決まっていたわけではなく、誰もがそれぞれを演奏する事が出来た。

技術の継承 太鼓の練習は、小学校3年生位から始められたが、それ以前でも親と一緒に叩いたりしていたので、実際には小学校に入る前から叩いていた。叩き方は覚えた人が誰でも教え、自分が覚えると、まだ覚えていない下の人にも教えるようになった。練習は、公民館の前身である青年小屋で行われていた。実際の奉納行事で叩くようになるのはセイネンになってからであった。

雨乞い太鼓の演目には2種類あり、網田神社へ行くまでの道程での叩き方を「道楽」、境内での叩き方を「早楽」と称する。上手な者になると踊りながら太鼓を叩いていたと言う。「早楽」が本当の意味での雨乞い太鼓にあたるとされる。太鼓の両面から二人が叩くが、別の調子で叩くので合わせるのが難しいとされる。叩く時にはコツがあり、上手下手もはっきりと判った。また、背が低いと太鼓に届きづらく上手く叩けない事もあった。雨乞い踊りの演目ははっきりしないが、境内で踊られる「手踊り」と、「にわか」で踊られる踊りがあった。踊りは昔ながらのものが婦人会によって引き継がれている。

管理、保存 太鼓収蔵庫が出来る前、太鼓は消防小屋に置かれていた。

太鼓の張り替え 太鼓の皮は牛の皮で出来ていて、昔のものは薄かった為2～3年経つと

破れてしまっていた。皮を張り替える時、昔は職人を呼んで、川の近くで水を掛け、上に人が乗って踏みながら張っていた。張り替えが終わるとお祝いにお祭りをして、宇土中を打ち込んで廻り、途中途中で「お花」（ご祝儀）をもらった。「お花」は張り替えの代金として使われていた。他の集落からも、豆腐2箱（9丁）と焼酎2升などを張り替えの祝いを貰う事もあった。最後に張り替えが行われたのは平成2年10月で、その時には松橋の熊の瀬（馬の瀬か）まで太鼓を運び、張り替え職人の宮村鶴雄さんが張り替えをした。現在引の花では太鼓保存会に6人入っているが、若者が少ない為、後継者不足に悩んでいる。

（調査者：金子俊二、上原陽平、畝原久美子）

下戸田地区

奉納行事 網田神社への奉納は、同神社の神官が中心となって、氏子区域の区長を集めて太鼓奉納を行う期日を決定した。

集落だけで行う雨乞い儀礼として、「堂籠もり」が行われた。宮司と区長が集落の堂に入って一晩籠もり祈願をする。堂籠もりを行うと、大抵翌日までには雨が降っていた。雨が降ったら、神へのお礼として、太鼓を奉納し、「にわか」を踊る。昔、干魃時の待望の降雨に、喜びのあまり突然踊りだした事から「にわか」踊りと称されたと言う。「にわか」の行列も仮装行列の様に派手で、男性は女性の、女性は男性の姿で踊ったりした。皆、一生懸命に出し物を工夫し、踊りの師匠を招いて習ったりしていた。

組織 雨乞い太鼓に関わる組織としては青年団があり、15～16才から加入した。網田地区が幾つかに分かれ、下戸田は「中央」と呼ばれる青年団に加入しており、構成員は約50名であった。

区長の下で集落の仕事を行うのが世話役であり、昔は大きな権力を持っていた。太鼓の保管は世話役の責任であったし、セイネン達も世話役の言う事を良く聞いて従っていた。休みを貰うにも世話役の承認が必要とされた。任期は決まっておらず、10年以上務める者も居た。

管理、保存 下戸田には太鼓小屋があって、そこで保管していた。

太鼓の皮の張り替えには1回で70万程かかった。片側だけで牛1頭を使った。平成7年に作り直した際には、周囲を削った為、少し小さくなった。

（調査者：金子俊二）

中登地区

由来 文化11（1811）年に大干魃が起こり、地区の者が堂に籠もって雨乞いをしたところ雨に恵まれた事に由来すると伝えられる。

奉納行事 8月9日、長福寺の薬師堂に雨乞い太鼓の奉納を行った。前日には、松明を持って水田の側道を歩き虫を祓う「虫追い」も行われた。大太鼓の他、鉦、笛が奏され、踊りも行われた。太鼓奉納には家々から最低1名は参加した。太鼓の奉納に際しては、集落の各戸がウケモト（頭屋）が輪番で務めた。

太鼓奉納に際しては「にわか」も演じられる。「にわか」は、雨乞いによって雨が降り出した際に喜んだ人々が思わず外に走り出て、「にわか」に踊りだしたのが始まりと言われていた。後に、各集落の寄り合いで演目が決められる。演じる順番は太鼓奉納の行列が網田神

社に入って来る先着順とされており、各地区とも早い到着を目指した。昭和24年には「豊作貧乏」の演目でにわかを演じた。その際に出演していたのは、18～50才までの10名程だった。「にわか」は昭和12年頃に一時中断され、昭和23年に再開されている。現在、「にわか」は9月1日の八朔当日に行われている。

技術の継承 先輩達から指導を受けて練習したが、小さい頃から見よう見まねで叩いていた。練習は庄屋家の広間で行った。

管理、保存 太鼓は庄屋家の小屋に吊して保管していた。鉦は公民館で保管した。太鼓は入札に掛けられ売却されている。

寺登地区

由来 農家が多い地域で、8月上旬頃の日照りが何日も続くと、雨乞いをする必要が出てくる。昔の人々が太鼓を打ってみたところ、雨が降ったので、それ以降祭りとして続いているのではないかとされる。戦前は実弾射撃で雨乞いを行った事もあったと言う。

奉納行事 雨が何日も降らないと、区長と網田神社の宮総代が話し合いをして、雨乞いする事を決めた。集落だけで行う際には薬師堂へ、網田全体で行う場合には網田神社へ太鼓を奉納する。一度行っても雨が降らなければ、もう一度雨乞いを行う。一夏で大体二度程雨乞いする。

雨乞いにより雨が降ると、神への御礼の意味で「にわか」を奉納した。集落ごとに唄や踊りの出し物をした。「にわか」の演題については話し合いで決定し、区長宅に集まって練習をした。

太鼓が保管してある太鼓小屋から網田神社へは行列を作って向かうが、この際に歩きながら叩くテンポの遅い叩き方を「みちがけ」と言う。神社に着いての速いテンポでの打ち込みを「はやがけ」と言う。「みちがけ」をしながら神社へ向かう途中で、民家から「お花」(ご祝儀)を貰った時には、それを笹に付けて、帰りにその家の前で打ち込みをした。

管理、保存 太鼓は民家の小屋に元々は保管していたが、後に寺に移し、さらに太鼓小屋を建てて保管する事になった。終戦後、雨乞いを行わなくなり、太鼓も入札に掛けられた事もある。太鼓の皮が痛むと、松橋の職人に張り替えを頼んだ。一枚の張り替えに80万円位掛かっていた。昔は、子供が遊びで叩いて破ってしまったり、若い人たちが酒を飲んで酔っぱらって破いたりした事も多かった。現在、寺登の太鼓は小学校で保管している。

(調査者：金子俊二、米正玄太)

第3節 宇土雨乞い大太鼓解説

ここでは、民俗学的視点から、宇土雨乞い大太鼓について解説を加える。

雨乞い太鼓は、本来、降雨を願う農村部の共同祈願行事、すなわち雨乞い儀礼である。共同祈願行事とは、特定範囲の社会集団がその集団全体の利益の為に共同で行なう祈願の事であり、しばしば、呪術的方法を伴って行われる。一般的に雨乞い儀礼は、氏神社など神社への祈願や、御籠、聖地からの水貰い、山上で大がかりに火を焚き鉦や太鼓を打ちならして騒ぐ千把焚き、水神の鎮まる聖地を動物の血や骨で意図的に汚濁し、その怒りの発現としての降雨を期待する方法などがとられる。

雨乞い太鼓の由来 宇土市の雨乞い太鼓の由来については、戦国時代に豊後の大友、薩摩の島津の列強に挟まれた肥後藩が兵員を多く見せる為に太鼓を用いたのが始まりとする説（上古閑地区）や、秀吉の時代に宇土の城主が農作業の慰労として許したとする説（猪白地区）、同じく秀吉の朝鮮出兵の折、朝鮮の大太鼓を真似て作られ、故に太鼓胴の前後を飾る木星の数が当時の豊臣家家臣大名の数であるとする説（堂園地区。宮庄、恵塚両地区でも木星の数を日本のクニの数とする伝承が聞かれる）などが伝えられている。朝鮮半島と太鼓との関係は、太鼓の皮の張り替えの際にそれを依頼した不知火地区に関しても聞く事が出来たが、実際にこの時期から大太鼓が伝承されて来たか否かは、それが伝承者の解釈である可能性もあり、伝承資料からは明らかには出来ない。

各地区に伝えられて来た太鼓の制作時期は、最も古いものが平木地区の寛文13（1673）年であり、他地区の場合も江戸期から明治期とするものが殆どである。中登地区では、文化11（1811）年に大干魃が起り、その際に地区の者達が堂に籠もった所、雨が降った事に由来すると伝えられる。雨乞い儀礼自体は、他地区でも古くから行われていたものと思われるが、現在の話者から聞かれる様な雨乞い太鼓奉納が定着したのは、江戸期以降の可能性がある。

聞き書きでは、雨乞い儀礼として太鼓を用いるのは、太鼓を叩いた際の大きな音響で空気を振動させ、雨を呼び、併せて神社への奉納を行って神に降雨を祈願する為とする話が多く聞かれた。注意されるのは、立秋あるいは土用終いを過ぎて太鼓を叩くと風を呼ぶなどとして、奉納行事が行われる時期以外に太鼓を不用意に叩く事を禁忌としている地域が散見される事である。この伝承には、神霊の去来を促す呪具としての雨乞い太鼓の性格が示されている。一般的に、雨乞い太鼓、雨乞い踊りは、太鼓や鉦の音曲で御霊的性格を秘めた水神を鎮め祀り、降雨を期待する風流系芸能のひとつとして位置づける事が出来る。宇土の雨乞い太鼓で特徴的であるのは、それが単なる干天の際の共同祈願行事としての意味にとどまらず、恒常的な年中行事として地域に定着している点であろう。

田植え終いと太鼓奉納 宇土市において雨乞い太鼓が行われる時期としては、大きく1)、田植え終了時期（サナブリあるいはカワマツリ時期）、2)、八朔及び旧暦8月9日の豊作祭りの時期、3)、集落神社の収穫祭の時期）、4)、夏期の干天の際などに類別出来る。サナブリは、田植えの終了を祝う農休みであるが、地域によっては、田植えを見守った田の神を送る田植儀礼でもある。宇土市の場合、田植えに際しての田の神の去来の伝承は明確ではなく、後に述べる八朔に田の神が帰るとする伝承が聞かれるに留まるが、田植え後の大きな娯楽として、太鼓の奉納は捉えられており、また、田植え後の順調な降雨と苗の育成とを祈る意味も持っていた。椿原地区、宮庄地区ではこれを根付け祭りとも称している。留意されるのは伊無田地区の例で、まず神社奉納に先立ち、夫長（鳶役。区長、副区長と合わせて「三役」とされ最も権威を有する）宅に太鼓を持ち込み、そこで共同飲食を行うが、これをヒャゴヒャゴと称する。共同体の長の下で共同体員の慰労を行い、併せてその結集を確認する行事であると思われる。

水神信仰、御霊信仰と太鼓奉納 上古閑、あるいは佐野では、太鼓奉納はカワマツリの一環として行われた。地域的には雁回山山麓の集落に太鼓奉納をカワマツリの一環として行う傾向が見られるのではないかと考えられる。カワマツリとは集落の溜池や用水路などに、胡瓜など水神が好むとする供物をワラツトなどで供え、水難除けとする行事である。災厄を生活領域外に洗い流す水に対する観念と、災厄の原因ともされる御霊に対する信仰とは結びつく傾向があり、雨乞い太鼓とカワマツリの結び付きの基層にもその様な観念複合が存在する

可能性がある。雨乞い太鼓と御霊系信仰との結び付きは他地区でも見受けられる。栗崎地区では7月14日から15日にかけて集落の天神様に太鼓奉納を行うが、この第一日目を「疫病祭り」とも称して、昔伝染病が流行った際に悪病を祓う行事として始まったと伝える。堂園地区でも、集落で天然痘が流行した際に、薬師如来の前で太鼓を叩いて病気を鎮めたと伝える。また、松原地区では、銅鑼を用いて雨乞い太鼓とするが、これを、「雨乞い銅鑼」ではなく「虫追い銅鑼」として、虫害などを招く悪霊的存在をムラの外部に送り出す鎮送儀礼に用いていた。一般的に共同祈願行事は、特定集団の内側の安寧、幸福を祈るものであり、外部の集団に対しては排他的な性格を示す。夏期の虫送りなど鎮送儀礼では、自分の生活基盤であるムラから災いなど悪霊を送り出す事が目的とされ、隣接するムラへの悪霊の移動は問題とされない。生活共同の範囲としてのムラを一つの閉じた世界と考え、その外部を他界と認識する思考がそこには顕著に示される。網田地区においても、旧暦8月期の豊年祭りの太鼓奉納に先立ち、松明を持って水田の測道を歩き虫を追う、「虫追い」が行われており、雨乞い太鼓の奉納行事と夏期の鎮送儀礼との関連がうかがわれる。

共同体の豊作予祝・祈願祭としての太鼓奉納 旧暦8月9日の豊作祭りの時期に行われる太鼓奉納は網田神社の氏子区域を中心として顕著である。この祭りは旧暦8月朔日の八朔と対になっている。宇土においては八朔に水田に酒を供え、作柄を誉め、その年の豊作を予祝・祈願するサクマワリの行事が行われている。このサクマワリは、個々の家を単位とした農耕儀礼であり、個人祈願行事とも言えるが、ついで旧暦8月9日に網田神社で行われる豊作祭りは、ムラを越えた網田神社氏子区域全体の順調な降雨と豊作を祈願する共同祈願行事である。網田神社への太鼓奉納が、元々旧暦8月9日に行われていたか否かは伝承上明確ではなく、引の花地区の様に、網田神社への奉納は夏期の干天時に網田各地区の区長が寄り合いの話し合いの上、決定したとする伝承も聞かれ、豊作の予祝・祈願的性格を持つ豊作祭りと雨乞い太鼓奉納はまた別個の行事であった可能性もある。

「共同祈願」の単位 一般的に共同祈願は、その祈願の達成により集団全体が利益を得られる場合、あるいは、集団内の特定個人のみが利益を得るとしても、そこに成員間の共感が成立する場合に可能となる為、祈願の利益や共感の成立する範囲に応じて「共同」の単位が設定される。最も一般的な「共同」の単位は、生活共同単位としてのムラであるが、この他にも、谷など水系で繋がる地域、ムラの下部組織たる村組、信仰的単位たる氏子集団などを単位として共同祈願が行なわれる場合がみられる。特に降雨は、広い範囲の農耕活動に直接影響する為、降雨を求める雨乞儀礼は、ムラ全体や特定の水利組織、あるいは、水系で繋がるムラが合同して行われる傾向が強い。また、雨乞い儀礼を一度行っても降雨が叶わぬ際には、出来るだけ多くの集団成員で、繰り返し儀礼を行う累積祈願のかたちとられる。干天時の網田神社への網田各地区からの雨乞い太鼓奉納は、各集落がムラの範囲を超えて合力して雨乞いを行う、より広範囲、累積的な共同祈願行事の一例と言える。

また、宇土市では、雨乞い太鼓奉納を年中行事的な儀礼として行う場合にも、その対象を各地区の集落神社、あるいは観音、薬師、権現などの堂宇とすると同時に、祭礼二日目などに、より広範囲な氏子圏を有する西岡神社（轟地区）や住吉神社（網津地区）、網田神社（網田地区）などに太鼓を奉納している例が多い。奉納の対象が、そのムラのみで信仰される集落神社と、より大きな祭祀圏を有する大社の氏神社の二重となっているが、年中行事化した儀礼としての最も基本的な太鼓奉納の単位は自然村としてのムラであり、その対象はムラ単独で祀る集落神社、あるいは堂宇であったのではないかと思われる。笠岩では、氏神社

の住吉神社に奉納した後、必ず地域だけで祀る弁天様へ太鼓を奉納しているが、産土的性格を有しムラ世界の中心たる集落神社（堂宇）とムラの住民とのより親密な関係がそこには垣間見られる。

より大きな氏子圏を有する大社に、個別の集落神社を持つ各集落が一年に一度、御輿などを出して参集する行事は、例えば茨城県のヤンサマチなど各地区にその例が見られる。宇土市の太鼓奉納では太鼓を集落神社の神々の依代とする意識はそれほど明確ではないが、一年に一度、地域の全体の氏神社に太鼓を結集する事で、大社氏子圏における神々の世界の階層性を人々に改めて印象づける事にもなったと思われる。また、大社氏子圏の各集落の人々が一同に集う事により、互いに同じ氏神の氏子であるとする共同体意識が毎年、確認される事にもなる。しかし同時にその場において、一番早く神社に到着した集落の太鼓が境内の神殿そばの位置を占めるなど、集落間の対抗意識も露わにされる。境内では、自然と互いの太鼓演奏や雨乞い踊りの方法、技能、衣装の艶やかさなどが比べられる事にもなり、それぞれのムラの雨乞い太鼓を中心としたアイデンティティの明確化が計られたものと考えられる。

世代間の競合と融和 太鼓奉納の方法は、各地区ほぼ共通しており、その中心となるのはムラの若者である。戦前には青年団組織が整備され、その団員が太鼓の担ぎ手の中心となったが、青年団組織整備以前は、佐野地区のワッカモン集団の様な旧来の年齢階梯集団がその中心だったと思われる。伊無田地区などでは、セイネンとチュウロウ（中老、壮年）とに別れ、太鼓を左右からがぶるが、そこには現実のムラ社会を支えている壮年者達と、これからムラの中心に育とうとする若者達の二つの世代の競合と融和が儀礼的に示されているとも考えられる。両者は、太鼓の奉納に際してお互いに押し合い、まず対立を示すが、最終的には共同して太鼓を神前に据え、一晚籠もって太鼓を叩き明かす。太鼓の皮の張り替えに際しても、青年達の申し出を、ムラの面立ち達はなかなか認めようとはせず、それにより青年達は、ムラの意向に反してもこっそりと太鼓の張り替えに出立してしまう。このような青年達の独断先行は、決して完全否定される性格のものではなく、最終的には村人総出で皮の張り替えられた太鼓を迎えに行き、行列を組んでムラへと帰ると言う、若い世代と旧世代との融和とムラとしての統合が示される事になる。

ムラとマチ 太鼓の張り替えに関わる行事で今ひとつ留意されるのは、何れの地区においても太鼓を張り替えた後、必ず本町通りまで出て、鼈負にしている商家の前などで打ち込みを行い「お花」を受け取る事である。宇土市においては、雨乞い太鼓は農村部のみに伝えられており、旧城下町である本町周辺地域には雨乞い太鼓を伝える所はなく、西岡神社獅子組による獅子舞奉納や、地蔵盆の地蔵祭りをマチ独自に伝えている。雨乞い太鼓そのものが、本質的に農作物の育成に不可欠である雨を乞う儀礼、あるいは農作物に災いを成す御霊を鎮める鎮送儀礼としての性格を持つものであるから、マチの家々が自ら雨乞い太鼓儀礼を行う必然性はない。しかし、太鼓の修復に際して、ムラの人々は、必ずマチへと立ち寄り、そこで「打ち込み」と言う祓いの儀礼を行い、その代償としての「お花」を受け取る。そこには、雨乞い太鼓を通した、ムラとマチとの交感が形成されている。マチとムラとは、その生産構造や社会構造も異なるが、宇土と言う一つのクニの中で、互いの生活が密接に繋がり、支え合っている事を自覚する機会でもあったと考えられる。実際、宇土のマチは轟水源からの水道によって支えられて来たと言う事実も、このようなムラとマチとが互いに別個の生活空間でありながらも、互いを支え合っているとする認識を育んだものと思われる。

（徳丸）

おわりに―雨乞い太鼓の今日的意義に関して―

現在の宇土市で、雨乞い太鼓が集落の神社への奉納行事として旧来どうり行われているのは椿原地区のみである。雨乞い太鼓奉納の多くは、戦中の徴兵による若者の減少や物資の不足によって中断され、椿原地区の様に戦後再開され現在まで継続している地区もあるが、多くの地区では長くは続かず、太鼓の多くは破損などにより修理される事なく地区の堂や消防小屋などに放置に近い状態で置かれる事になった。

椿原地区の奉納行事は3年に一度であり、最近では1997年度に行われたが、報告書作成期間にはそれを実見する事は出来なかった。その報告は2000年度の観察調査の資料を踏まえて、市史本編において別に行うが、宇土市においては、平成2年度の竹下内閣による「ふるさと創生資金」による轟地区の太鼓收藏館の建築、及び各地区に残っていた雨乞い太鼓の再生により、宇土市の夏期のイベントとしての宇土雨乞い大太鼓フェスティバルが全市をあげて開催される事となった。最後に、網田引の花地区を例として、宇土市雨乞い太鼓保存会が文化財保護、及び地域振興の一環として行っている宇土雨乞い大太鼓フェスティバルへの地域住民の参加過程の紹介を行う。

1998年8月1日、宇土市市民グラウンドにおいて雨乞い大太鼓フェスティバルが開催された。好天にも恵まれ宇土市の各地区から数多くの雨乞い太鼓が参集し、伝統的な雨乞い太鼓や勇壮な創作太鼓、そして雨乞い踊りが披露された。引の花地区においては、フェスティバルの数ヶ月前から、集落の公民館で雨乞い太鼓保存会会員と子供達によって雨乞い太鼓の練習が行われていた。

我々が記録させていただいたのは、7月31日の夜から1日のフェスティバル、そして2日の打ち上げまでである（この過程は別にVTRによる映像資料を作成し報告した）。

写真37～39 7月31日の夜8時、我々が公民館に伺うと、既に数名の地区の太鼓保存会会員、そして老人、子供達が集まり、部屋の隅に置かれた太鼓を叩いて練習を行っていた。練習は、子供達を中心に進められ、時折、大人達が太鼓や鉦を叩いて叩き方やテンポの模範を示し、それを子供達が真似て叩いていた。子供達が叩くとどうしても徐々にテンポが速くなってしまい、主に

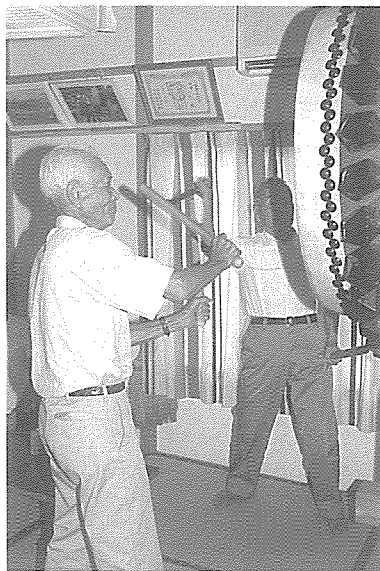


写真37 太鼓を叩き模範を示す伝承者達（引の花地区）



写真38 鉦を打つ伝承者（引の花地区）

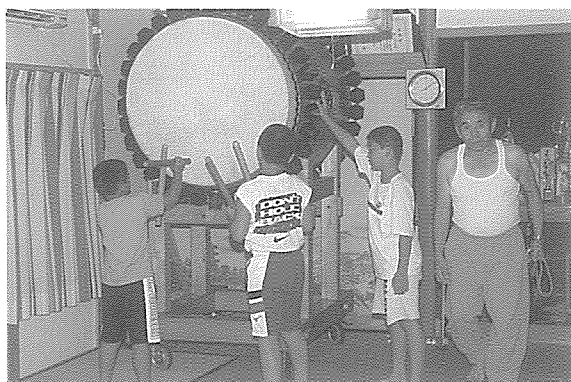


写真39 太鼓の練習を行う子供達（引の花地区）

写真40 その内、地区の婦人達や子供達の数も増え、婦人達は台所で餅米を蒸し、餅搗器で搗いて、紅白の餅を作り始める。手の空いている男達は子供達の太鼓の練習を見ながら、酒と肴で談笑に花を咲かせている。

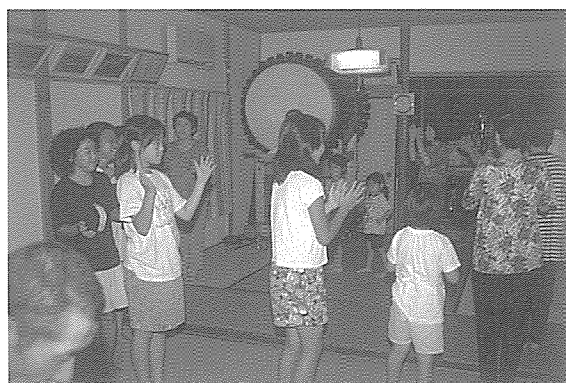


写真41 雨乞い踊りの練習（引の花地区）

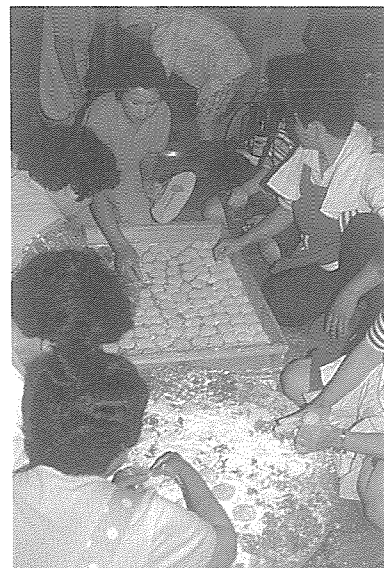


写真40 紅白の餅を丸める婦人達
（引の花地区）

写真41 やがて婦人達が餅を作り終わると、皆、座敷に上がって円陣となり、雨乞い踊りと、河内音頭に合わせた踊りの練習が1時間程行われ解散となった。



写真42 フェスティバル当日の祝宴（引の花地区）



写真43 柱に貼られた「お花」の金額（引の花地区）

写真42～43 8月1日の雨乞い大太鼓フェスティバル当日、昼前から公民館にフェスティバルに参加する人々が集まり始め、昨夜搗いた餅を「引の花」と印刷された小さな紙札と共に袋に入れたり、出立ち前の祝宴の料理が調理された。部屋には、最真にしている商店から届けられた「お花」（ご祝儀）の金額を記した半紙が幾つも貼られている。男達はおにぎりと酒で食事を採りながら、色々な準備やフェスティバルの打ち合わせを行う。

写真44～45 その最中にも集落の田畑から、稲株や玉蜀黍、葉付きの里芋、トマトなどが持ち寄られ縁側に置かれた空の酒樽に置かれる。これは樽御輿に用いられる。酒樽に孟宗竹の担い棒を一本藁紐で縛り付け、樽の中央に作物を立てて御輿の形とする。

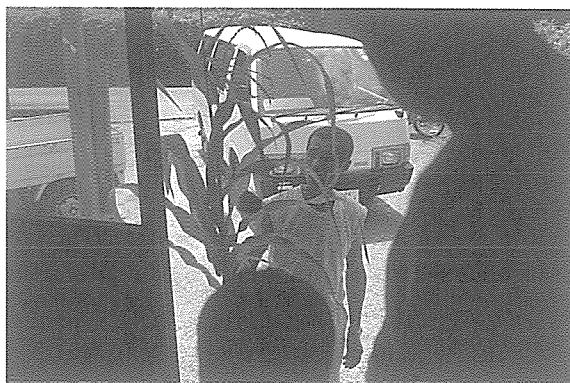


写真44 樽御輿に使う里芋の葉が運ばれて来る
(引の花地区)



写真45 樽御輿の製作
(引の花地区)

写真46～47 午後2時位に、太鼓を公民館の座敷から引き出し、軽トラックの上の台座に担ぎ上げる。太鼓の胴左右には注連縄が貼られ、太鼓の面には紅白の綱が飾られる。また「引の花太鼓保存会」の幟が二本立てられた。

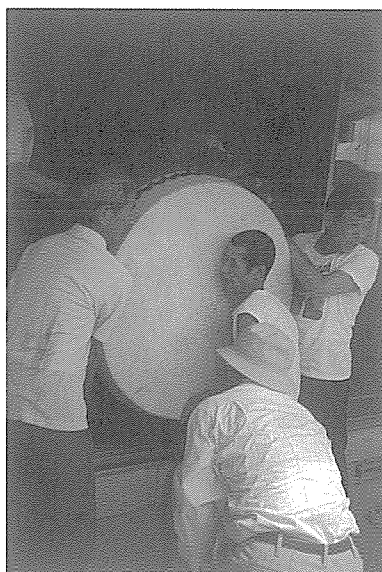


写真46 太鼓を公民館から運び出す
(引の花地区)



写真47 太鼓を飾る (引の花地区)



写真48 網田神社への道行き (引の花地区)

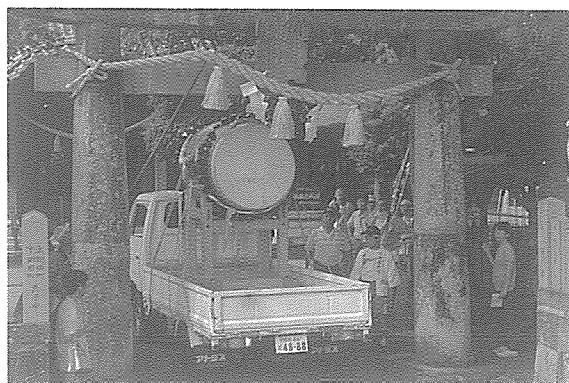


写真49 網田神社の鳥居をくぐる太鼓 (引の花地区)

写真48～50 午後3時位に、太鼓を乗せた軽トラックは鉦を伴って公民館前を出発し、まず網田神社へ向かう。鉦はカーンカンカンと「道行き」を夏空に響かせ、青田の中を太鼓はゆっくりと進む。神社に着くと鳥居を慎重に潜って拝殿前に太鼓が据えられる。まず、網田



写真50 網田神社での太鼓奉納（引の花地区）

神社の神職へ挨拶しお祓いを受けた後、シデを受け取り、太鼓の注連縄に挟んで飾る。それから、子供達が「雨乞い太鼓」を叩いて奉納し、続いて大人達が奉納する。



写真51 フェスティバル会場への道行き（引の花地区）

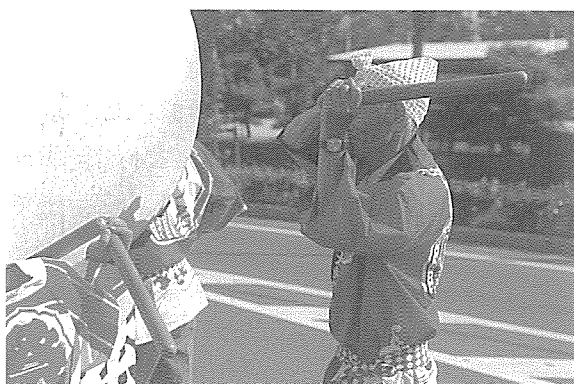


写真52 道行きの太鼓（引の花地区）

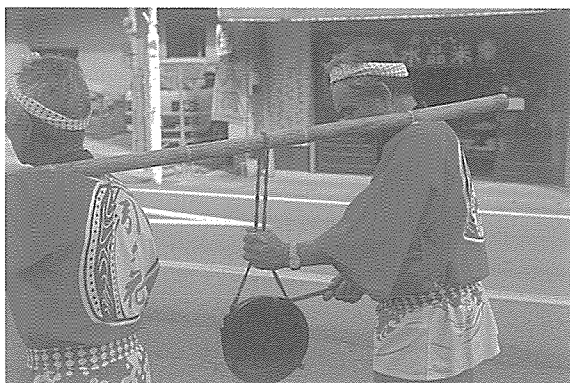


写真53 道行きの鉦（引の花地区）



写真54 樽御輿（引の花地区）

写真51～55 フェスティバルの集合場所からは、太鼓を軽トラックから降ろし、鉦や樽御輿と共に綱で曳いて、「道行き」を叩きながら会場の市民グラウンドへ進んで行く。途中、集まっている見物人に餅入りの小袋を撒く。



写真55 見物人に餅を撒く（引の花地区）

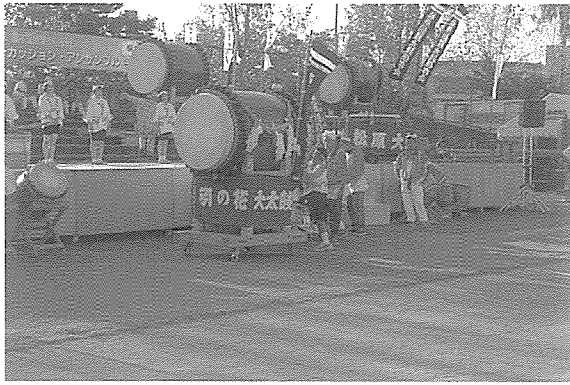


写真56 フェスティバル会場での太鼓の奏演
(引の花地区)



写真57 樽御輿を中心に雨乞い踊りを演じる
(引の花地区)

写真56～57 会場に到着すると一休みの後、各地区の太鼓の披露が始まる。引の花では、伝統的な「雨乞い太鼓」の披露の後、婦人達による「雨乞い踊り」と「河内音頭」に合わせた踊りが披露された。その際に、樽御輿が舞台に担ぎ込まれ、その由来が説明され、踊りの円陣の中央に置かれた。この後、夜半までフェスティバルは続けられた。

引の花地区でフェスティバルへの参加の過程を実見して感じた事は、その練習や準備の過程において地区住民間、そして世代間の交流が極めて活発に計られ、それが、彼らのアイデンティティを明確化する方向へと結びついていると言う点である。

今回の太鼓の練習は、子供達に対して区長が中心となって教える形を取っていたが、その合間合間で、集まった太鼓保存会の会員や老人達が打ち方の模範を示し、それをまた別の老人が聞いて談笑しながら自分の打ち方を示していた。堅苦しく言えば、それは「雨乞い太鼓」と言う地域の伝統文化を下の世代に伝え、自らの足元を再確認させる文化伝承の場であろうが、そこで醸し出される雰囲気は極めて和やかなものであった。雨乞い太鼓を中心として様々な世代の者達が集い、思い出を語り、己の技を示して下の世代に伝えようとする。強制的に大人が子供に技を教え込もうとするのではなく、教える大人達も子供達も双方が和やかな空気の中で太鼓を「楽しんでいる」のが印象的であった。雨乞い大太鼓フェスティバルは、旧来の民俗行事を元に観光化を計ったものである。各集落はそのフェスティバルを協賛する立場を取るが、その準備や祭礼への参加の過程では、単なる義務的に参加をしているのではなく、「雨乞い太鼓」を軸にして地域社会の結合を再認識し、活性化しようとする積極的な人々の姿を見る事が出来る。

宇土市において、観光化したもう一つの行事は8月の地蔵盆に行われる「地蔵祭り」である。地蔵祭りでは、宇土本町通りを中心としたマチの商家が工夫を凝らした様々な作り物を展示し、町内毎に子供達が地蔵を飾って道行く人に賽銭を乞い籠もりを行う。この行事には、熊本市や周辺の町村からも多くの観光客が訪れ、数多くの屋台が軒を連ねる事もあって、市の観光行事としての意味合いも強くなっているが、基本的には本町、新町を中心とした宇土市におけるマチの祭礼であり、農村部の村々はこの行事には関係を持たない。対して、雨乞い太鼓フェスティバルの主導は農村部の村々によって行われ、彼らは、周辺の各農村部から雨乞い大太鼓を市の中心たるマチまで結集し、会場に集まった観光客に対して太鼓を「奉納」する。かつての「雨乞い太鼓」は、祈雨や農耕の順調なる事を願う集落単位での共同祈願であり、地区によっては網田神社での太鼓奉納の様に地理的に隣接する集落単位までその共同祈

願の規模は拡大する。現在の雨乞い太鼓には、祈雨などの意味は失われているが、そこでは、自らの帰属する地域の活性化と言う「祈願」が込められている。

それは、単にフェスティバルに多数の観光客が訪れマチが活性化する事を祈るだけではなく、若者の流出で後継者不足に悩む農村の担い手達が、自らの伝統文化を今後も伝えて維持して行けるだけの活力が地域に芽生える事を切実に祈願している姿と報告者には捉えられた。これも共同祈願行事の現代的なひとつのありかたと言えよう。

調査においては、各地区の皆様に変にお世話になりました。最後になりましたが、心よりお礼申し上げます。

(徳丸)

第4節 熊本の雨乞いについて

雨乞いはかつて日本全国で盛んに行われた行事であった。そのやり方は実にさまざまで、雨籠もり、禊ぎ、水かえ、動物を犠牲に供えたり、託宣、水迎え、火をたいたり、わざと汚物を水神に掛けて怒りを買ったりするなどの習俗がみられた。

また、雨乞いに芸能が付随することもよくみられるものである。

現在では地下水を汲み上げるなどの方法で水田の用水を確保することが可能になり、雨乞いをすることはほとんどなくなった。しかし、戦前までは毎年のように行われていた。明治期には時折県下各地で雨乞いが行われていることが新聞に報じられていて、水不足がいかにも農業を営む上で深刻な影響をもたらすかを伝えている。その降雨を祈願する方法にはさまざまなものがあつた。それらについてみてみることにする。

県下各地でもっともよく行われてきたのは、水迎えというもので、これは集落単位で、代表者数名（3名程度）を選んで、水神として農家の信仰を集めていた、阿蘇町の踊山の打越神社（牛馬の神様としても知られていた）に出向き、ここにある湧水池で持参した御幣をつけたタカンボ（竹筒）に水を汲んで戻るというものであつた。この時、水を入れた竹筒は決して途中で地面につけてはならないというのが約束事であつた。つけた所に雨が降るとされていたからである。したがって、竹筒を交代で持つ者が必要であつた。集落の人たちは途中で出迎えるのが恒例であつた。

雨乞いに効果があるとされた神様としては、打越神社以外に西原村のお池さんも水神として有名である。また、それ以外の神仏に水を汲みに行くこともなされていた。古くはこれらの地まで徒歩で夜を徹して歩き続けていたという話も聞くこともできるが、大正時代以降は遠隔地の集落の場合は最寄りの駅まで汽車で行くことが普通になってきた。

氏神社の拝殿に籠もることもよく行われていた。集落単位で、普通3日を一応の区切りとして、各戸から1名が出て籠もるというものであつた。それでも雨が降らなければ7日間程度に延長した。それでも効果がなければ、やや日をあけて再度試みることもあつた。

この場合、昼間は老人、夜は戸主というように一家の家族が交代しながら籠もり続ける。食事は各家に戻ってとるのが普通であつた。神官も一緒に籠もり、祝詞を奏上する。西合志町では、3日目をマンガンサイ（満願祭）といい、神官と宮総代がシオヒタシといい、ふんどし一つで川に入って身を清め降雨を祈願したという。

氏神社ではない場合もよくある。上益城郡益城町では、雨乞いをアマガンダテという。木山ではウルヨケといい、仕事を休んで閻魔堂に集まり、供物を供えて降雨を祈願し、その後

宴会をしていた。寺迫では各戸から1名が閻魔堂に集まり、木山神社の神官かヤンボシさんに依頼してお祓いをしてもらっていた。そして鉦・太鼓を盛んに叩いた。袴野では天神様にお籠もりしていた。総領では木山神社にお籠もりし、数日間籠もった後、ソウバンタテといって、津森の潮井さん（潮井山の水源）にお参りして太鼓を叩いていた。

玉名郡玉東町山口・稲佐では木葉山の頂上に祀られている権現様に籠もっていたという。籠もっている最中に大太鼓を叩くことも行われていた。太鼓を叩いてその振動で雨を降らせるようにするので、少しでも空に近い所で行うのだという。なおかつ、できるだけ大きな太鼓の方が効果があるという。

この祈願の最中に雨が降ると、山を下りて、区長の家を集まり、宴会を開き、それから山の入り口にある権現様の鳥居の前でお礼の舞を奉納し、山口から稲佐まで踊って廻り、最後は流れ解散していた。この踊りの行列が通る道筋に当たる家では踊り手に酒を振る舞っていたという。踊り手は腰に瓢箪を提げ、手に団扇・ウナギテボ・すりこぎ棒などを持つ。囃子（ガクという）は太鼓のほかに鉦・横笛・三味線・拍子木がある。玉東町では雨乞いを行うのは山口・稲佐のみで他の地区が行ったということはないという。なぜ、この両地区のみなのかについては分からない。

これとは逆に、熊本市河内町の芳野地区（山間部）では、雨乞いは麓の北部町太郎迫神社で行っていた。この神社境内に湧水点があり、どんなに日照りが続いても枯れることはないという。そこに妙見が祀られている。ここでお籠もりをしながら太鼓を叩いて祈願していたという。雨乞いは各集落が思い思いにやっていたという。それで、複数の集落が同時に雨乞いをするということもあったが、共同で祈願することはなかった。妙見が水神として信仰されるのは熊本の特徴で、妙見神渡来伝承と関係を持つ下益城郡豊野村の小熊野神社でも近世に雨乞いが行われていたことを示す史料がある。

このように、神社やお堂に籠もりながら青年たちが太鼓を叩くということは熊本市内でもよく採られた方法である。太鼓は宇土同様の太鼓である。この太鼓の叩き方に集落ごとの違いがあり、それでどこの集落かが分かったといわれているが、現在も伝承されている所は少なく、その実態はほとんど分からない。

熊本の籠もりでは、出席者に対して、別火精進を課したり、皆が一緒になって唱え言を唱えたり、般若心経を読んだといったことはなかったようで、単に籠もって過ごすというのが一般的であった。

雨乞いに際して、太鼓を叩くだけでなく雨乞いの踊りを伴うことも少なくなかった。そのような例としては、熊本市河内町尾跡の十禅寺楽、岱明町大野下の奴踊り、山鹿市の小坂の雨乞い踊り・宗方万行、阿蘇町荻の草の瓢箪突きなどがよく知られている。これらの踊りには踊り手が瓢箪を提げること、囃子に三味線が加わっているという共通点がある。小坂・宗方万行や山口・稲佐の踊りは激しく体を上下させたりするのが特徴で、宗方万行は願嘗という念仏僧から教えられたと伝承されているように念仏踊りの系統に属する踊りと思われる。十禅寺楽、荻の草の瓢箪突きは北部九州にみられる楽の系統の芸能で、福岡、大分などでも雨乞いの芸能として演じられてきたものである。球磨郡では湯前町や水上村などで臼太鼓踊りが雨乞い時に演じられていたことが知られている。天草郡でも佐賀の浮流と同系統のものが演じられてきた。これらは楽と同じ太鼓踊りに属する芸能である。ただ、牛深市久玉の太鼓踊りは虫送りとして行われるものであり、虫送りと雨乞いの性格を持っている。

玉名郡南関町でも戦前はしばしば雨乞いが行われていた。昭和14年に細永全体（2ヶ村が

交代)で大津山神社に籠もったのが最後であった。雨乞いを行うかどうかは区長会で協議して決定した。「雨乞いは関村から」といわれ、関村が最初に行うとされていた。個々の集落が独自に雨乞いをする人が多いが、南関(広くいうと玉名郡)ではより広範な地区で協議して共同で行動する傾向が強い。ただ、その方法は地区によってさまざまであった。小原では阿蘇から水を貰って戻ってくると鉦・太鼓で出迎え、地区内の池に櫓を組んで僧侶を招いて祈祷してもらっていた。そして、太鼓・鉦を打ち鳴らして踊る。この踊りを瓢箪回しという。関外目では阿蘇に水汲みに行くことを水乞いといっていた。山車の上に横笛・鉦・太鼓という囃子方を乗せ、水乞いに行った者を途中まで出迎え、楽を演じていた。

益城町本土山では雨宮さんに神官と一緒に一週間を目途にお籠もりしていた。各家の戸主が参加することになっていて、食事は家族の者が届けていた。一週間続けても効果がなければ雨宮さんのご神体を神輿に乗せて山王免池に投げ込んだ。この時、ご神体を縄で縛ったり、泥を投げつけたりした。こうすると神様が怒って雨を降らせるからという。ご神体を池に投げ込む習俗は全国的にみられる習俗であるが県下では余り例をみない。

海浜部や水源近くの集落では神輿を担ぎ出して神幸式を行う例もある。雨乞いに際して神の出御を仰いで目的を果たそうというものである。天草郡五和町御領ではお籠もりの満願の日に神輿を船に乗せて海上を3周する例がある。

消防団員が手押しポンプで各家の屋根に水を掛けて廻るということも県の北部を中心に広くみられた。玉名市迫間では正野神社にお籠もりをしている間に団員が掛けて回った。水は各家がたらいや瓶に水を入れて準備しておき、ポンプを用いて掛ける水はほんの少しであった。同様のことは西合志町などでも行われていた。これは乾燥しているので火事にならないようにとの意味が含まれていると説明されることが多い。

鐘を淵や川などに浸けて雨が降ることを祈願することも県下各地で聞くことができる。八代市宮地の悟真寺の鐘を淵に浸けて祈ると雨が降るというお告げがあり、それで日照りの時は鐘を淵に沈めて祈願することが始まったという。天草郡栖本町では、利明寺の住職に3日若しくは7日間百万遍を唱えてもらい、それでも効果がなければ、寺の鐘を青年達が担いで栖本川に雨が降るまで沈めていたという。竜宮の乙姫様がこの鐘を欲しがっていて、川に沈めると海まで流れるように雨を降らせるのだという。本渡市木戸では安珍清姫の作り物を作り海に投げ込んでいたという。

南関町小原に鐘が淵という池がある。伝承ではこの池のそばに安心院という寺があったが、鐘とともに池に沈んだとも、昔、村で雨乞いをしていた時に寺が池の底に吸い込まれ、やがて大雨になったという。実際に鐘を浸けることはないが、鐘と降雨との関係を伝える沈鐘伝説は熊本市にもある。

牛の首を川や池などに投げ込むと雨が降るという伝承を阿蘇・球磨郡で聞くことができる。球磨農業高校ではかつて日照りが続くと雨乞いといって、牛の首の作り物を持って練り歩いたという。実際にそれを経験した人に理由を聞いても分からないとのことであったが、かつて牛を生け贄にする習俗があったかも知れない。

宇土市内で行われた雨乞いは大太鼓(銅鑼と称する地区もある)を打ち鳴らす、あるいはそれに踊りを伴う形式のことが多い。雨乞いの歌を伝える地区もあるが、基本的には県下各地に伝承される雨乞いと共通するものである。その詳細については各地区ごとの報告に譲ることにし、ここではいくつかの点に絞って述べることにする。

宇土の雨乞いは大きな太鼓を叩くことを中心にするものである。太鼓を用いる形式は県下

に広くみられるものである。太鼓の振動が降雨に効果があるとする伝承はどの地区にも共通している。このことは宇土に限らず県下どこでもいわれていることである。

雨乞いが行われる時期としては、土用（3日間）の期間中とする地区が多い。この期間の雨乞いは川祭りとしての性格を有している。特に、水神としての河童に（児童の水難除けの意味も込めて）好物のきゅうりなどを供物として捧げたりする祭りの一環として太鼓を奉納するものである。この時期の太鼓奉納は県下でそれほどみられない。

それから、田植え終了後のサナブリ祝いの期間中に、区で日時を決めて、豊作祈願、五穀豊穰祈願として雨乞いの太鼓が奉納されていたという地区も多い。そのなかで注目されるのはかつて悪病が流行した時に演じられたと伝えられている、悪霊退散（疫病退散）と結びついた栗崎地区の事例である。それと同時に、これが7月14日に西岡神社の神官を招いて行われることも見逃せない。この時の太鼓奉納は精霊送りの意味合いもあるものと思われる。疫病退散や精霊送りの雨乞い太鼓は鹿児島県にみられるが県下ではほとんど聞くことのできない事例である。

また、松原地区では雨乞いではなく虫追いのためのものであると伝えている。太鼓の振動で虫が落ちるといふ。虫追いと結びついた太鼓の例は、牛深市久玉・町内の原、天草郡河浦（旧 一町田）で知られている程度である。

このような、雨乞いだけのために行うものではないといった伝承を持つ地区もあるが、これはそれぞれの地区の立地条件とも関係すると思われる。水不足の心配のない地区では雨乞いをする必要がなかったし、水田地帯とそうでない地区によっても雨乞いの持つ意味が異なっていたとも考えられる。この点はさらに詳細な調査が必要である。

奉納の対象となる神仏としては氏神の他に、稲荷と妙見（猪白地区）、弁天様（笠岩地区の溜池のそばに祀られている）、観音堂（佐野地区）、三宝院の鎮守観音、氏神社の天神、西岡神社へ奉納（石橋地区）して回るといふ例もある。

稲荷は農業神としての性格を有するものであり、妙見は前述したように県下では水神と考えられている。弁天も水神として信仰されている。水に関係する神仏がみられるのも雨乞いの性格に由来するものと考えられる。

雨乞い太鼓はそのほとんどが隊列を組んで、太鼓を台の上に乗せたり、棒に吊したりし、それを叩きながら踊って歩く、あるいは太鼓を固定してその周囲で踊るという形式を採っている。このような形式は十禅寺楽や玉東町、天草郡一帯などと共通するものであるが、鉦・太鼓・笛という囃子の構成は天草と同じである。

踊り手は男性のみであったり、女性の参加も許されている地区もあったりしている。装束も地区によりさまざまであるが、男が化粧を施して蓑笠を身につけた（平木地区）例がみられる。蓑笠は雨具であり、雨を期待するあらわれとみることができる。

芸態については実際に演じる場面の観察調査がほとんど行われていないので何ともいえない。ただ、話を聞く限り近世成立の芸能であると考えられるが、この芸能の伝搬、相違などを明らかにする上でも、地区ごとの細かな調査が不可欠である。今後の課題である。

このように、宇土における雨乞いは県下に広くみられるものと基本的には同じものであり、宇土独自のものは認められない。ただ、県下の多くの地区が雨乞いを行わなくなっていることを考えれば、宇土に伝承されている雨乞い太鼓が持つ意味は大きいといえる。

（安田）

参考文献 高谷重夫『雨乞习俗の研究』法政大学出版局 1982年

話者一覧（生年月日がない人は、調査当時の地区嘱託員の方）

平木地区

丸山 秀敏 大正14年 1 月 8 日生
斎藤 孝則

松原地区

松落 英雄 大正14年12月26日生
松永 輝雄 昭和 6 年 5 月21日生
原坂 敬介 大正 9 年 2 月11日生

築籠地区

朝田 フキ 明治45年 4 月18日生
船橋 重喜 大正 9 年 2 月19日生
沼田ハツエ 大正10年 8 月28日生
福島 健 大正12年 8 月12日生
村上 謙吾 大正14年 9 月 8 日生

上古閑地区

内田三代志 大正 3 年 3 月18日生
那須 中 大正 4 年11月 4 日生
那須 生信 大正 9 年11月25日生
那須喜久男

立岡地区

釜賀 正人 明治45年 1 月 5 日生
岡部 保

佐野地区

上村フミ子 大正 4 年 1 月30日生
中山 昭二

椿原地区

荒川 初男 昭和 8 年 5 月 9 日生
荒川みよこ 昭和 8 年 5 月 1 日生
中口 邦雄 昭和 6 年 6 月14日生
嶋崎 照男 昭和 7 年 4 月 1 日生

飯塚地区

飯田 勇 大正11年 8 月22日生
飯田 五月 昭和 8 年 5 月 1 日生

石橋地区

東 政治 大正 5 年11月11日生
堀田儀三郎 大正 8 年 2 月20日生
堀内アサコ 大正13年 1 月 5 日生
小森 道雄 昭和 8 年 1 月 2 日生
佐伯 勇 昭和21年 4 月 3 日生

宮庄地区

中村 一男 大正 5 年 5 月 2 日生
木村トミエ 大正 8 年10月31日生
佃 増男 大正 9 年 1 月 3 日生
木村シズノ 大正 9 年 8 月 4 日生
坂本 正二 昭和 8 年 4 月 1 日生
中村 信幸 昭和19年 4 月 2 日生
元田 春生

伊無田地区

前田 武記 大正 4 年 1 月29日生
末富 藤男 大正13年 1 月 6 日生
今村 重喜 大正14年 3 月 7 日生
末富 清治 昭和 8 年 9 月23日生
掃本 至 昭和 9 年 1 月 1 日生
末富 政之 昭和 7 年 9 月30日生
末富 勲 昭和17年11月17日生
前田 国男 昭和 8 年 2 月25日生
掃本 博之 昭和21年 1 月10日生

栗崎地区

浅川 貞美 大正 7 年12月 4 日生
浅川 義男 大正10年10月17日生
福永 伴生 大正14年10月 4 日生
境 正 大正14年11月30日生
西村 龍登 昭和12年11月29日生

笹原地区

太田黒日出男 大正 2 年 9 月15日生
伊藤 勝信 大正11年 7 月 5 日生
西田 清 大正11年 9 月20日生

岩本 勝彦
中島 信義

新開地区

大久保チカコ 大正14年 4 月 7 日生
宮田 静雄 大正 5 年10月 2 日生
津沢 克吉

城塚地区

宮本 辰雄 明治38年 9 月25日生
村上ツキノ 明治44年 2 月19日生
松本 末範 大正 7 年 1 月 5 日生
田中 益夫 大正 7 年 2 月13日生

松岡 峰一 大正8年8月2日生
 北野 勝義 大正12年1月7日生
 山口 勝 大正13年9月11日生
 田口 精 大正14年9月20日生
 丸山 弘之 昭和6年2月20日生
 村上 襄一

恵里地区

三輪 百生 明治45年6月8日生
 岩山 恒人 大正13年3月18日生
 高木 久芳 昭和14年10月14日生

網引地区

木村 浩徳 昭和36年3月9日生
 木村 正三 大正3年12月23日生
 高嶋 朝清 大正2年9月20日生
 木村ミユキ 大正1年12月25日生

木村 勝義
 橋本 明

馬門地区

津川 幸 大正7年11月30日生
 中口 義勝 大正14年8月8日生
 奥村 義人 大正6年1月20日生
 斉藤 芳光 大正13年12月20日生
 清田 邦雄 昭和2年1月7日生

西中村地区

益田 静幸 大正11年12月12日生
 益田 次恵 大正13年6月5日生
 小田 重寿

笠岩地区

岩村 東洋 大正16年9月10日生
 岩木 秋則 大正8年11月2日生
 山本 熊一 大正10年2月10日生
 山本 道雄 昭和4年11月25日生

堂園地区

水口 軍喜 大正3年5月5日生
 竹道 一二 大正4年2月19日生
 加悦 一孝 昭和4年7月14日生
 加悦 二男 昭和4年5月5日生
 加悦 ヨキ 昭和5年12月31日生
 石坂 弘喜

引の花地区

宮川菊太郎 明治40年5月20日生
 田添 秀雄 大正2年7月20日生
 村田 精一 大正10年4月15日生
 園田 勝 昭和14年7月21日生
 杉山 健一 (網田神社)

下戸田地区

谷川 茂 大正7年10月10日生
 河野 辰雄 大正14年2月13日生
 寺本 幹雄 昭和13年1月18日生
 石谷 健一 昭和7年9月1日生
 石谷 信子 昭和8年5月11日生

中登地区

藤川 一喜 大正2年10月30日生
 中野 隆之 昭和5年5月19日生

寺登地区

森 武雄 大正8年8月8日生
 寺野 春義 大正8年5月10日生
 本多 孝二 昭和7年4月5日生